

十字架の陰陽師—キリシタン陰陽師・賀茂在昌—

とりいな くれい
鳥位名 久礼

序文

戦国から桃山の世にかけて、「キリシタン陰陽師」が活躍した。その名は、マノエル^{かもあきまさ}賀茂在昌。

そんなあまりにも格好良く出来過ぎた、架空歴史・歴史ファンタジーものの漫画かゲームのような、魅惑的な夢物語じみた話だが、そうではない。実在の人物である。

——と言い切ってしまうのは、実は歴史学的には妥当ではない。がしかし、その可能性は確かに存在する。

同時代の記録を多数残した宣教師ルイス・フロイス他のイエズス会士達が書き残したキリシタン文献に、公家にして天文学の名家の出である「Manoel Aquí Marza」・「Aquimasadono」という人物が「都で初めてのキリシタン」となり、伊予（愛媛）を経て豊後府内（大分市）に滞在、などという記録がある。

また日本側の文献には、天正年間から慶長初期・織田信長と豊臣秀吉が天下人として君臨したいわゆる安土桃山時代に、「賀茂在昌」・「あきまさ」という陰陽師が都で活動し、秀吉の創建した「京大仏」方広寺の地鎮祭に携わったことなどが記されている。

この「Manoel Aquí Marza」と「賀茂在昌」が同一人物であるという確証は、未だ得られていない。仮に同一人物であったとしても、史料に乏しく、その人物像は謎に包まれている。

史実の「Manoel Aquí Marza」・「賀茂在昌」についての歴史学的研究は、他の専門的文献に当たっていただきたい。

これから綴る物語は、それら歴史学的記録・研究の様々な断片を元に、「キリシタン陰陽師・マノエル賀茂在昌」という、実在した「かも知れない」人物を、存在した「かも知れない」歴史的架空設定と物語的空想で多分に補って再構築し描き出した、ノンフィクションめいた「歴史創作小説」である。

第一部 少年と十字架

一 伴天連来訪

時は戦国。乱世の最中であって、西国周防国なる山口の街は「西の都」と称され、賑やかなひとときの栄華を極めていた。

山口に君臨する守護大名・大内氏は、^{よしおき}義興（一四七七～一五二八）の代より京の都の朝廷と室町幕府中枢部に深く通じ、その気風は次代の^{よししたか}義隆（一五〇七～一五五一）にも受け継がれた。相次ぐ動乱で荒廃した京の都からは数多くの公家達が山口へ落ち延び、西国の彼方にありながら雅やかな都振りが華開いた。また、西海に通ずる交通の要衝として、明や遠く東南アジアからの交易で舶来した豊かな文物が集積され、この街の栄華をさらに彩っていた。

天文十九年（一五五〇）和暦十一月の或る日。底冷えする寒さにも怯まず賑わう山口の街の中心、その中でもひとときわ、時ならず賑わう人だかりが出来ていた。

黒いピロードの衣に白いレースの衿袖、白肌の長身に鼻筋の通った彫りの深い顔立ち。その全く見慣れぬ姿の異国人の一团に、群衆たちは我先に人混みを掻き分け、一目拝むや刮目した。

「南蛮人来朝」と大きな驚きをもって噂されたこの異国人こそ、はるか西洋・ポルトガルから日本に初来航した伴天連（カトリック・イエズス会の修道司祭）、かのフランシスコ・ザビエル（フランシスコ・デ・シャヴィエル、一五〇六～一五五二）とその一行である。

「宇治丸、どこか見えるところないかしら」

「^{ひろ}広、こっちだ。早く、いや気を付けて」

「大丈夫よ、これくらい平気なんだから」

群集の隅で、町家の脇手から板葺き屋根によじのぼる、少年と少女の姿があった。やんちゃ極まりない行動だが、身なりの悪いただの町小僧ではない。薄汚れながらも良家の子らしく、整った装束と聡明な面立ちをした二人だ。

「よし。ほら、見えたぞ！」

「わあ……珍しい人達！」

「本当に珍しいなあ……！」

町家の屋根の上に立って、広場を見下ろす。幼い口からとっさに出た「珍しい」という言葉、その一言ではとても語り尽くせない感嘆に、二人は目を丸くして輝かせた。その「異国人」の姿は、多感な少年少女の目に、いかに新鮮な輝きをもって映ったことだろう。

「あいや、こんなところにおられた！　なんて無茶なことを！　おーい、広姫様、危のうござりますぞ！」

やや老けた男の叫び声に、少年と少女は慌てて振り向いた。

「今梯子を！　これ、そこの者、どこぞに梯子はあらぬか！」

男が町人をどやして梯子を調達する間、二人は気まずそうに降り仕度をしつつ、見合って苦笑を交わした。

「僕が連れ出したのです。広……広姫様は悪うござりません」

「なんだこら、また宇治丸の仕業か！　全くこやつときたら」

すずすずと梯子を降りると、少女をかばうように男に向かって、神妙に、だが毅然と釈明する少年。そのやや後ろで、いたたまれなさそうに少年の横顔を見つめる少女。

「申し訳のうござります。広姫様も、危ない真似を申し訳のう」

「……」

「南蛮人来朝」の噂を聞いて、屋敷を抜け出して街へ見に行こうと言い出したのは自分である、と告白できる状況ではなかった。

「全く、この日の本にやってきて、殿君や^{くぼう}公方様・天長様の許しもなく、傍若無人に南蛮の異様な宗門を辻で説くとは。実にけしからぬ、不遜極まりない輩共じゃ。世も末というものじゃわい。決して近づいてはならんぞ。広姫様も、慎まのうてはなりませぬぞ」

男——二人の住む屋敷に仕える^{けにん}家人は、この異国人たちの来航を快く思っていないようだった。二人とも公家の落人の屋敷で育てられ、神道を学ぶ身の上。その屋敷に仕える家人としては致し方ないことである。

身分上は、少女・広のほうが格上、他ならぬ山口領主大内義隆の庶子である。少年・宇治丸はといえば、一時期戦乱を逃れて山口に下った下級公家の庶子で、父は彼の出生を見届けることもなく京へ戻ってしまい、その後いわば広に仕える者として引き取られた身。

二人とも、庶子・いわゆる「落とし子」として実父母の元から離され、肩身狭く世の隅で育てられるという共通した身の上で、数え八つの歳から共に一つ屋根の下で育てられた同い年。当人同士は生まれの違いなど意に介さず、良き幼馴染みの間柄である。とはいえ、厳然たる身分の格差が公の場で二人の間を隔てていた。

二人の齢は数え十二歳。この宇治丸と呼ばれる少年が、のちのキリシタン陰陽師・^{かも}賀茂在昌（一五三九～

一五九九)である。

- ・在昌の生没年は生年を二十年遅く設定している。詳細は第一部末コラム。

二 陰陽師、その地味な史実

いまだかつて一目たりとも顔合わせたことなき宇治丸の父、その名は勘解由小路在富かでのこうじあきとみ（一四九〇～一五六五）。公家としては下級な部類の家柄ながら、二十五歳にして朝廷陰陽寮の長官「陰陽頭」おんみょうのかみに任ぜられ、宇治丸出生の三年前・山口下向時には上流公卿と肩を並べる従二位、先の物語の翌年・天文二十年（一五五一）には六十二歳で正二位まで昇りつめた、老練な陰陽師。在富の場合はあくまで長寿と長年の功労に報いた、「非参議」という実権のない名誉位階ではあるが、正二位とは本来の律令の官位では左右二大臣に相当する高い位階であり、家格からすれば稀代の大出世である。

賀茂氏勘解由小路家は、かの安倍晴明あべのせいめい（九二一～一〇〇五）の師である賀茂忠行かものただゆき（八九〇頃～九六〇）・保憲やすのり（九一七～九七七）父子以来、朝廷の陰陽師を世襲してきた家柄。晴明の子孫・安倍氏は天文道、片の賀茂氏は暦道という、陰陽道の二本柱をそれぞれ家学としてきた、いわば陰陽道の二大家元の一つである。室町時代になると、安倍氏嫡流は土御門家、賀茂氏嫡流は勘解由小路家を苗字として名乗るようになった。

なお、陰陽道賀茂氏の出自はいささか不確かながら、山城国（京都）の上賀茂・下鴨神社を氏神とする在郷氏族「賀茂県主氏」かものあがたぬしではなく、大和国（奈良）葛城（現・御所市付近）ごせに発し、天武朝から奈良時代にかけて朝廷中枢に官人として仕えた「賀茂朝臣氏」かものあそんの子孫と伝わる。

さて、ここで大前提を話しておこう。史実の「陰陽師」とは、俗に知られる魔法使いのような存在ではなく、本来は、朝廷の部署「陰陽寮」に属し、天文観測を元に暦を作り司る、いわば国立天文台職員のような理系専門技術職——あえて云ってしまえば、地味な下級国家公務員である。

もともと、日柄や方位、天象などの「吉凶」が重んじられた平安朝廷にあって、陰陽師はそれらにまつわる「占い」や「厄祓い」をも任されるようになり、次第に、道教・神道・仏教（密教）の要素が渾然一体となった独特の呪術的体系を形成していった——さらには、やがて朝廷の官人以外の巷でもこれを模倣した占い・祓はらえの祭儀が行われるようになり、民間呪術者集団を形成していき、彼らも俗に陰陽師と称されるようになった、ということもまた事実である。

いずれにせよ、宇治丸の父方・勘解由小路家は、乱世に翻弄され身を潜めつつ、京の都の片隅で日々暦司りに忙殺される下級公家。妖術使いや妖怪退治などは、残念ながらこの物語には無関係なことである。

三 父・在富の山口下向

宇治丸と広の出自、それは両者とも一筋縄にはいかない難儀なものであった。

天文五年（一五三六）七月、京の都は未曾有の戦乱と大火の阿鼻叫喚に包まれた。比叡山延暦寺の動員した約六万人もの僧兵と武士が京都市中に来襲、日蓮法華宗の拠点をことごとく焼き払った。延暦寺勢力が放った火は大火を招き、京都は下京しもぎょうの全域、および上京かみぎょうの三分の一ほどを焼失。その災禍はかの応仁の乱よりも大きく、京都史上最凶の戦禍と云われる、「天文法華の乱」である。

上京勘解由小路（現・下立売通）したたちりどおりにあった勘解由小路在富の邸宅も飛び火を受け、屋敷の半分ほどを焼失、命からがら妻子と家伝の暦道の書物を守りきった。在富四十七歳の年であった。

この時点で生存し、のちに成人まで育った子女は、日枝子十二歳と阿多子九歳という二人の娘のみ。唯一の男子であった十七歳の金龍丸は、乱の矢面に立って挺身的に家族を避難させた結果、戦火に巻き込まれて

絶命してしまった。

乱世の中での激務と困窮とで元来子宝に恵まれなかった在富、先に生まれた子はみな天文法華の乱以前に夭折してしまい、自らはこの歳で、唯一の妻も今や四十二歳である。もとい、半壊した邸宅と焼け出された家族の回復が当面の死活問題であり、とてものこと側室など迎えるどころの騒ぎではない。自らの血を引く跡取り息子の望みはほとんど潰えて、ただでさえ災難に目眩する在富の絶望たるや計り知れない。

妻方の親戚が社家（神主の家柄）である京都東山の吉田神社に妻子を預け、ひとまずの收拾をつけた在富は、西国の雄・大内義隆（一五〇七～一五五一）を頼り、周防山口に下向した。周防国には勘解由小路家の貴重な財源である所領があり、先代・大内義興の代から大内氏と勘解由小路家は密接な関係があったのだ。すなわち、所領を護持してもらって代わりに京都での地位を取り次ぐという、持ちつ持たれつの関係である。新当主である大内義隆への顔繋ぎ、そして財政再建のための所領護持確認が、山口行きの主目的である。

大内義隆は八年前の享禄元年（一五二八）、父・義興の没を受け二十二歳で家督相続し、当時三十一歳の若き武将。先代の大内義興は、永正五年（一五〇八）在富十九歳の頃に、山口に逃げてきた前將軍・足利義隆を奉じて上洛し、十年間京都と近畿に滞在して、「管領代」として幕政を執行した。その間、伊勢神宮に参拝して強い感銘を受け、山口に戻ると天皇の勅許を得て伊勢神宮の分霊を勧請、建物まで忠実に伊勢を再現した「西の伊勢」と称される高嶺太神宮（現・山口大神宮）を建立したほどの神道びいきであった。

大内義隆もまた、父・義興の薫陶を受けて都振りびいき・神道びいきであった。この時、二十一歳の若さながら「神祇管領長上」という神道界の頭領的地位にあった吉田神社祠官・吉田兼右（一五一六～一五七三）も、大内義隆の招きによって在富とともに山口に赴き、父義興の遺産である高嶺太神宮と今八幡宮で、当時神道の一大流派となっていた「吉田神道」の流儀を指南した。

この吉田兼右、歳は離れているが、実は在富の妻の弟にあたる姻戚である。在富の正室・木根子および吉田兼右の父は、国学・漢学の大家・清原宣賢（一四七五～一五五〇）。その父（兼右と木根子にとっては父方祖父）は、仏教・儒教・陰陽道などの要素を集大成した吉田神道の創始者・吉田兼俱（一四三五～一五一一）、という碩学の家柄である。在富の山口行きは、この義弟吉田兼右の同伴という意義もあった。

在富は、山口に二年間滞在したのち京都へ戻った。乱世にあつて、ことに在富にとっては絶望のさなかにあつて、「西の都」での滞在は貴重なしばしの安息の時であった。

- ・天文法華の乱で在富邸が焼かれたという点は架空。
- ・在富の娘二人と絶命した息子一人は架空。名の由来は生まれ年の干支から。詳細は第一部末コラム。
- ・在富が山口に下向したという点、吉田兼右がそれに同行したという点も架空。
- ・在富妻の名と出自も架空。名の由来は生まれ年の干支から。詳細は第一部末コラム。

四 落人の落とし子

絶望の淵からのしばし貴重な安息——こんな時に、否、こんな時だからこそ、であろう。在富は山口滞在中、一つの「気の緩み」を生んでしまった。

「西の都」山口には多くの公家が落ち延びて暮らしていたが、大内義隆の「後宮」もまた、公家の娘揃いであった。正室は、天文十五年（一五四六）に内大臣まで進んだ中堅公卿・万里小路秀房（一四九二～一五六三）の娘・貞子。在富山口来訪の時には二十六歳。名門の出とあって、理知的で気丈な賢婦人であった。

その貞子に仕える侍女「上臈」という地位にあった者で、朝廷の官人・大宮伊治（一四九六～一五五一）の娘・佐井子（おさい）という若い女がいた。大宮家は、朝廷の諸記録を司り、算博士という地位を世襲する家柄。「公家」とは厳密には「堂上家」という家格分類の者を指し、それ未満の家格で朝廷に仕える者は

「官人」、家柄としては「地下家」と呼ばれる。大宮家は、その地下家という分類の中では筆頭格とはいえ、大雑把に云ってしまえば最下級公家である。

最初の時には数え十七歳のうら若き乙女であった大宮佐井子と、父子ほどの歳の差である四十七歳の在富は、山口での二年の間に、こともあろうか行きずりの恋仲になってしまったのだ。

京からの一行来訪歓迎の宴席で佐井子と出会った在富は、彼女の家柄を知って関心を持ち、言葉を交わした。他の公家柄の者と違って、成り上がり公卿である自分に対しても高飛車ではなく、誰に対しても分け隔てなく慎ましやかに振る舞う佐井子に、好感と娘のような親近感を覚えた。

同じ才女でも、気性が強く気位も高い正室貞子と違い、佐井子は利発ながら謙虚で温厚な乙女だった。暦道と算学という近い家学からも意気投合し、学問の話の文を交わし、歌文を交わし、想いを交わし——それは絶望の淵にあった在富にとって、この上ない安らぎであった——そしてやがて、相通じ合う仲となった。

まるで源氏物語のような話だが、現実問題は美談でも笑い事でもない。恋相手は、世話になっている大名の奥方の侍女である。当然秘め事であったが、運命なるかな——二年の時を経て、在富が間もなく京へ戻るというその時、佐井子は身籠ってしまったのだ。

二人は、別れを惜しんで、しかし運命を受け入れて、静かに涙を呑んだ。そして別れ際、胎の子がもし女兒なら自分の別れ形見に、もし男児として生まれ、無事一人前に育ったなら、これを携えて京へ遣るように——と、自筆の暦道の初歩指南書に、六壬式占りくじんしきせんという占いのための式盤を模した手のひらに収まるほどの銅盤を添えて、佐井子に託した。

時に在富四十九歳、佐井子十九歳。在富は、二歳下の同輩公卿で前年周防に下向した持明院基規じみょういんもとのりと共立って京都へ帰った。

年が明けた天文八年（一五三九）一月末、凍てつく梅の枝にもつぼみがほころび始める頃。山口の街の片隅で、公に祝われることもなく密やかに、のちに賀茂在昌となる男児は産まれた。京都の岩清水八幡宮になぞらえて、先代大内義興の代に大改修し立派な社殿が建立された「今八幡宮」。男児はその社家に預けられた。

創建当初の祭神・宇治皇子うじのみこから昔は宇治社と呼ばれていたことに因み、男児は宇治丸と名付けられた。あるいはもう一つには、悲恋の別れを源氏物語の「宇治十帖」になぞらえた母佐井子の密かな想いもあったのかも知れない。

- ・おさいの方は実在。佐井子という字と年齢は架空。在富との恋も架空。
- ・在昌が山口で生まれたというルイス・フロイスの記録あり。
- ・在昌の幼名「宇治丸」は架空。

五 領主の落とし子

「英雄、色を好む」という諺の通り、大内義隆は女性関係にも豪傑であった。史書に名が残る者だけでも、正室二人、側室一人がいた。

在富が山口に下向した時の一行には、権中納言・武家伝奏という地位にあった公卿・広橋兼秀三十一歳（一五〇六～一五六七）と、その長女・光子十四歳も同行していた。光子はそのまま山口に置かれ、大内義隆の大叔母が晩年を過ごした広徳院という尼寺に入り、庶務係の稚児ちご・「喝食かつじき」という任に着いた。

それから二年後、ちょうど在富が京都へ帰っていった頃。在俗の庶務とはいえ、仮にも寺院に仕える者、しかもまだうら若き数え十六歳の少女——それがこともあろうか、ふとしたことから大名大内義隆の目に留

まり、見初められてしまったのだ。

在富と佐井子との切ない恋とは違い、義隆の「御見初め」は手が早く、いささか強引であった。ある時、親族の年忌法要に訪れた義隆は、寺の隅にいた光子が目にとまるや一目惚れといった有り様。のちには正式に側室として迎え入れられたものの、最初の頃はたびたび使いをやって連れ出して、光子は寺の者たちの後ろ指差しを買った。

ほどなくして、光子は子を孕んだ。未だ正式な側室となる前のことである。そして宇治丸の生まれと同じ年の暮れ、こちらもまた公に祝われることもなく密やかに、数え十七歳の若さで光子は女兒を産んだ。

これが男児であったなら処遇もまた違っただろうが、嫡出でない女兒というのは惨めなものである。父・義隆は産まれたのが女兒と伝え聞くや祝いに訪れもせず、一つ山口の街にいながら、生涯ただの一度も間近に顔を合わすことはなかった。

ここに至って光子はようやく正式に側室として迎え入れられ、「広徳院御新造」と呼ばれた。女兒は母光子の住地・広徳院と実家・広橋家から一字を取って「広」と名付けられ、光子の正式な側室入りと引き換えに、高嶺太神宮に仕える一禰宜（神職）の家に預けられた。

- ・広徳院御新造は実在。光子という名と年齢は架空。彼女の長女「広」も架空。

六 祖父にして養父

大内義隆の妻はこれで二人出てきたが、もう一人にして二番目の正室は、何を隠そう、あの太宮佐井子である。

勘解由小路在富が京へ戻ったのち、佐井子もまた義隆に見初められて側室となった。在富との想いを抱えた佐井子にとっては辛い心境であったが、ひとたび義隆の目にとまれば、その想いはたやすく打ち砕かれてしまったのだ。

気丈すぎる性格と気位の高さが災いして、正室万里小路貞子は豪傑義隆とのそりが全く合わなかった。一夫多妻が当たり前であった当時にあっては尋常でないほど嫉妬心も深く、義隆の側室との付き合いにたびたび強い苦言を呈した。そこにあって、義隆の心はいつしかすっかり、謙虚で温厚な佐井子に移ってしまったのだ。

天文十四年（一五四五）、おさいの方と呼ばれた太宮佐井子は二十六歳の時、のちに嫡子大内義尊となる男児・亀童丸を産んだ。義隆はこれを大いに喜び、盛大に祝した。

ここに至って正室貞子の面目は完全に潰され、大いに憤慨したあげく離縁して京都の実家へ戻ってしまったのだ。佐井子は正室に昇格し、貞子の旧邸・東の御殿を与えられ、以後そこに住むこととなった。かくしてのち、佐井子とその初子・宇治丸とは二度と会うことがなかった。

これまたこれを大いに喜んだ佐井子の父・大宮伊治は、翌年の天文十五年（一五四六）、五十一歳にして山口に下向してきた。伊治は二代目正室の父として大名大内義隆に大いに歓待され、すっかり上機嫌になった。そして、乱世の動乱続きで荒れ果て政情不安定な京の都と、繁忙なわりにうだつの上がない朝廷の官職をなげうって、屋敷を与えられてそのまま山口に住み込む身となってしまった。

伊治は、娘・佐井子の落とし子の宇治丸、そして大内義隆の落とし子で同い年の広という娘の存在を知ると、二人の養父となることを申し出た。かくして、数え八歳になった宇治丸と広は、宇治丸の母方祖父・大宮伊治の山口邸宅に引き取られ、共に育てられることとなった。

二人は、養父伊治に家学の算学と公家としての教養「有職故実」を、そして生まれ育ちの地・今八幡宮と高嶺神明宮に通って吉田神道を学び、立派な教養階級の子に育っていった。

・宇治丸と広を大宮伊治が養子としたという点は架空。

七 伴天連再来

さて、物語の時間軸は、主人公とヒロインの父母の慣れ初めから生誕、そして養育歴までに至るエピソードへ遡り、ようやく冒頭第一章に追いついた。

インドのゴアに置かれた東洋大司教座から、「黄金の国」として西洋人航海者の夢の的であった「ジパング」日本への宣教を任せられたフランシスコ・ザビエルは、天文十八年（一五四九）・ユリウス暦八月十五日、薩摩（鹿児島）に到着した。一行の中には、ゴアで洗礼を受けたヤジロウら三人の日本人も共にいた。戦国時代にあつて、遠くインドにまで日本人が来航していたことは、当時の日本の海外私貿易がいかに盛んであったかを偲ばせる。

一行は薩摩国の守護大名・島津貴久に謁見、一旦は宣教の許可を得たが、仏僧の助言を聞き入れた貴久が禁教に傾いてしまったため、京に上ることを目指して薩摩を去った。一行は肥前国（佐賀）の平戸に入り、宣教活動を行った。

そして天文十九年（一五五〇）和暦十一月上旬、山口に至り、無許可で宣教活動を行った。これが冒頭第一章「伴天連来訪」の物語の背景である。

ザビエルは大名・大内義隆にも謁見した。が、珍しい異国の文物宝物を目にすることと「献上」されることを楽しみにしていた義隆の期待と裏腹に、一行は珍奇とはいえ質素な身なりで献上品の一つもないという結果が失望と無礼に値するという不満を抱かせ、加えてこともあろうか、「男色を罪とするキリスト教の教え」が、「豪傑」義隆の怒りを大いに買ってしまったのだった。さすがの豪傑らしい逸話である。

一行は十二月十七日に山口を発ち、目的の京都へと向かった。途中、堺の豪商・日比屋了瑠の知遇を得て、その支援により、年が明けた天文二十年（一五五一）和暦一月、念願の京に到着。了瑠の紹介で小西隆佐の歓待を受けた。そして全国での宣教の許可を得るため、後奈良天皇および室町将軍への拝謁を請願。しかしこのたびもまた、長旅で身なりは薄汚れ、献上の品もなかったため、また政情も不安定で将軍は京に不在、その念願は叶わなかった。ザビエルは失意のうちに、山口を経て、平戸に戻っていった。二度目の山口来訪である。

ザビエルは、平戸に置き残していた宝物の数々を携えて三度目の山口来訪を行い、四月下旬、大内義隆に再謁見の機会を得た。これまでの苦い経験に学び、日本の風習では貴人との会見時には威儀を正した服装と献上品が重視されることを知ったザビエルは、本来質素な黒い長衣の修道服を着るべきイエズス会修道士としての会則を敢えて破り、ポルトガル来航船の豪商から借りたルネサンス貴族のような最上等の洋服で一行を装い、天皇に捧呈しようとして用意していたポルトガル王国インド総督とゴア大司教の親書の他、小銃、望遠鏡、置時計、眼鏡、洋書、洋画など珍しい文物を義隆に献上した。

これに喜んだ義隆はザビエルに宣教を許可し、当時廃寺となっていた大道寺をザビエル一行の住居兼教会として与えた。これが日本最初の常設の教会堂である。ザビエルはこの大道寺で熱心に説教を行った。

八 伴天連との出会い

前年の伴天連来訪を目撃して感激を覚えた宇治丸と広は、二度目の来訪も懲りずに眺めに行き、三度目の来訪で伴天連一行が晴れて大名の許可を得て山口に長期滞在することが叶ったと知るや、此度こそはと思いきって連れ立った。数え十三歳の時であった。

「当分大道寺留め置きだって。今度こそしっかり間近に拝みに行きましょ！」

「うん。今度こそ！ 口実は僕がうまいこと伝えておいたから」

荒れ寺となっていた大道寺は、今や南蛮寺・天主堂として立派に補修され、梁には異国の文字の額、屋根

破風には十文字形の飾りが掲げてあり、大勢の人々が集っていた。が、伴天連は洋装ながら質素な修道服、日本人のキリシタン通訳は首に提げた十字架以外は全く僧侶の姿をしており、期待したほどの異国情緒は見られなかった。

二人はその末席に着いて、会衆と伴天連が通訳を通して語り合う問答に耳をこらした。

「天主様の坐す神の御国とは、いずこに在るのでござりましょう。伴天連様方のお出でで来られたというはるか西の海の彼方のふるさとは、極楽浄土がまことに在るのでござりましょうか」

伴天連の前に座り込んで、熱心に問いを發し、その答えに聞き入る僧形の男がいた。うつろな眼と視点の定まらないしぐさ、持ち物と身なりから、琵琶法師と分かった。琵琶法師には目の不自由な者になる、というのは通例である。

「我々のふるさとは、西方極楽浄土などではありませぬ。神の御国とは、何処に在る、其処に在る、というものではありません。神の御国は、我々、そなた方、全ての人のうちにこそ在るのです」

伴天連が聞き慣れぬ異国の言葉で話すと、通訳の者が丁寧に解き明かした。

「そ、それでは、我々も今すぐに、その恵み深き神の御国を垣間見て、天主様のみ恵みにあずかることができるのでしょうか」

「救い主なる現人神・耶蘇様と結ばれ、そのみ教えを受け入れ、その行いに倣い、その命の光を一身に受ければ、この身は耶蘇様の復活の命に与り、日ごとに新たにされてゆく——そこにこそ、全て時と空間を超えて、神の御国は顕現するのです。御父・御子・聖霊の三位一体なる天主様は全宇宙を創り給うた方、耶蘇様もまた父なる神と一体なる御子にして主なる神。そのみ恵みは、全て生きとし生ける者、森羅万象に至るまで、あらゆる処にあまねく注がれています。太初にありし如く、今も何時も世々に——」

最後の一句とともに、伴天連は指先で胸元に十文字の形を切り、天窓から差し入る光を見上げて念じた。

「で、ではどうか今ここに、その顕現をお見せくださりませ。我々は日々苦しみ、み救いを待ち望んでおります……私めのごとき目の見えぬ者でも、尊き姿を拝することが出来るのでござりましょうか」

琵琶法師もまた、差し入る光を手探りするように首を上げた。

「目の見えぬ者は幸いです。この世の虚しくも衆目を囚われにする美に目眩ますことなく、まことに美しく尊き、見えざる天の賜物に目を開くことができるからです」

伴天連は優しく、琵琶法師の手を手を取り、額から目元にかけて手をかざした。

「日曜日の巳の刻（午前十時）、ミサという聖なる祭儀を行います。その中で献げる聖餅と聖葡萄酒が、先ほど読み上げた聖福音経の通り、耶蘇様が尊き十字架の死に引き渡され給うた前の晩、弟子たちに仰せになった如く、聖霊によって耶蘇様の尊き御体と御血になります。そこに、死より復活し、死を以て死を滅ぼし、世々に生き続けたもう耶蘇様が、全てを超えて臨在せられ給い、全てを超えて我々と交わり、神の御国の窓が顕現するのです」

「あな恐れ多きことかな……かくのごとき聖なる祭儀に、私めのような下賤の者でも与ることができるのでござりましょうか」

「貧しき者、苦しむ者は幸いです。その人は満たされ、癒されます。父なる天主様はそのような『小さき者』のためにこそ、御子耶蘇様を世に遣わし給うたのです」

「伴天連様……！」

琵琶法師は、半開きの虚ろな眼から涙を流した。探りゆらぐ琵琶法師の手のひらを、伴天連は慈しみ深く握りしめた。

この問答と光景を見聞きして、宇治丸と広も幼心にも強く心打たれ、澄んだ目を潤ませた。

散会際、無心になって最後まで残っている二人に、一人の伴天連が声を掛けた。

「今日はようこそ。お二人は武家のご子息ですか？」

「はい、あっ、いえ。大宮家という公家の元に養われている身です」

「そうか公家ですか。では学問にも励んでおいでのことでしょう」

「はい、実は神道の勉強を。僕の実の父は京の陰陽師——天文学者、らしいのですが」

「ほう、天文学の家柄ですか。それは素晴らしい。しばしお時間はありますか？」

「あ、はい。少しくらいなら大丈夫です」

「天文学」という宇治丸の一言を聞いて、伴天連は興味を示し、奥の司祭館に二人を案内した。

「これは天球儀、天体の巡りを模式化した道具です。東洋にも確か似たものがありましたな。しかし、こちら東洋では星座が西洋とはだいぶ異なるようすな」

「渾天儀とよく似ていますね！ はい、日本にも似たものがあります」

寺の住坊を改装した司祭館は少しばかり洋風の設えで、珍しい舶来の品々があった。期待していた異国情緒を目にして、二人は興味津々、目を輝かせた。

「これは天体望遠鏡、はるか天空の星までしかと見える遠眼鏡です」

「そんなものが！ 日本の陰陽師は目視頼りです」

「そして一番お見せしたかったもの、これは地球儀。地を象って球に全地上の陸と海を記したものです。全ての大地は、一つの球のもとに繋がっているのです」

「わあ、それは初耳です！ 地は球の形をしているのですか……！」

「左様。太陽や月と同じく、夜空に輝く千々の星々も、みな大小の球。地球もまた、大宇宙にあっては一つの小さな星に過ぎず、太陽の回りを水星・金星・火星・木星・土星と同じように周回しているのです」

天体望遠鏡と地球儀は、二人にとって最も興味をそそられ、また驚きの事実を示す品だった。

「地球もまた一つの小さな星……それぞれの星にも人は住んでいるのでしょうか？ そう考えると、この地上の人間というものは、なんだかとてもちっぽけな、塵砂粒にも満たないような者に思えてきますね……」

「地球以外の星に生き物がいるか否か、それは分かりませぬ。しかし、我々の知る限り、天主様はこの地球と我々人間を深く慈しんでおられる。人間一人一人、そして天地の全てのものは、天主様が大きいなる慈しみを込め、『善し』と仰せになって創られ、命を分け与えられた、『神の似姿』。主の御目には、誰一人、何一つとして、価値なきものは在らぬのです」

「命を分け与えられた、神の似姿……」

二人は改めて地球儀を見つめつつ、伴天連の言葉を反芻した。

「ね、宇治丸、感動したね……」

「うん、感動した……」

「あの琵琶法師のおじさん、救われるといいね……」

「うん、救われるよ……きっとね」

帰り道、二人は五月晴れの夕日の中、並んで道を歩きながら、固く手を握り合った。

この琵琶法師は、ほどなく洗礼を受け、「キリシタン」となった。後にイエズス会の強力な宣教師となった「ロレンソ了齋」（一五二六～一五九二）。そして、宇治丸と広の相手をした伴天連が、のちに二人を窮地から救い出す恩人となった、コスメ・デ・トーレス司祭（一五一〇～一五七〇）である。

山口での宣教は成功し、約五百人もの信徒を獲得した。ザビエルは大道寺を与えられて宣教を始めてから約二ヵ月間の宣教活動が過ぎた和暦七月頃、豊後国の中央都市・府内（現・大分市）にポルトガル船が到着したとの話を聞きつけ、山口での宣教をトーレス司祭に託し、豊後府内へ向かった。そこで、守護大名・大友義鎮よししげに迎えられ、その保護を受けて大々的に宣教を行った。この時の大名が、後にキリシタン大名として知られる大友宗麟そうりんである。

- ・ザビエルが山口大道寺にて布教し、ロレンソ了齋がその際に入信したことは史実。その他の描写は架空。
- ・「神の御国とは、何処に在る、其処に在る…」——ルカによる福音書 17 章 21。

九 非業の養子

こうして山口ではザビエル再来で平和な時が流れていた頃、京の都は未だ政情不安定、そしてまた勘解由小路家を巻き込んだ一動乱が起こっていた。

時は遡って、勘解由小路在富が京へ戻った翌年の天文八年（一五三九）、ちょうど宇治丸が生まれた年のこと。在富の弟・賀茂在康かものあきやすの息子で、在富にとっては甥にあたる数え十九歳おひの在種あきたね（一五二一～一五五一）が、在富の養子として迎え入れた。天文法華の乱に巻き込まれて父を亡くし、一時は路頭に迷った末に、在富の妻・木根子の計らいで、吉田神社脇手の空き家を譲り受けた勘解由小路家新邸宅に引き取られた青年であった。

在富としては、山口にて別れた大宮佐井子に宿された自らの子が気がかりだったが、それは表沙汰にはできぬ秘められた話であり、手紙も交わせる状況ではない。産まれたのは男児か女児か、はたまた死産やも分からぬうえに、いくら平和な西の都山口とはいえ、乳飲み子が青年まで育つ保証はどこにもなく、夭折が日常茶飯事であった時代である。一か八かの落とし子に賭けるのは無謀なことだ。

自らも寄る年波は五十歳、しかも京を離れている間に縁組の談はほぼ固まっていたとあって、在富は秘めた想いを押し殺して、この甥・在種との養子縁組談を呑んだ。

時戻って、その十二年後の天文二十年（一五五一）、ちょうどザビエル一行が三度目の山口入りをもくろみて平戸で仕度をしていた、和暦三月のことである。

この頃、細川晴元はるもと・三好政勝みよしまさかつらに担がれたまだ幼い将軍足利義藤よしふじ（後に義輝と改名）は、これと対立する三好長慶ながよしによって、京都から比叡山を隔てた近江国（滋賀）堅田に追放され、幕府界限には強い緊張関係が生じていた。

そんな中、三月七日、十四日の二日にわたって、京都洛中で将軍の留守を預かる幕府政所執事まんどころ・伊勢貞孝いせさだたかの邸宅に会見中であつた三好長慶に対し、将軍方の刺客による暗殺未遂事件が発生した。一回目の犯人は挙動不審な態度からすぐに逮捕・処刑され、二回目は長慶に手傷を負わせたが失敗して、刺客・進士賢光しんじ たかみつは即座に自害した。さらに翌十五日には、これに乗じて将軍方の三好政勝こうざいもとなりと香西元成が三好長慶本拠地丹波宇津に侵入するという動乱が起こった。

在種は、この暗殺未遂事件に囚らずも関わってしまったのだった。

在種としては、勘解由小路家の復興に少しでも役に立ちたいという一心で引き受けた仕事だった。しかも、まさかこのような物騒な事件になるとは知らなかった。ただ、とある知り合いの武士に呼び出され、伊勢貞孝邸付近や洛中の近況と、今月の「日柄」を訊ねられて答え、守秘命令とともにわずかな謝礼を受け取っただけであった。

しかし、事が起きると暗殺計画への関与を疑われ、義父在富ともども三好方の尋問を受け、あわや懲らしめ寸前という一大事になってしまったのだ。在富は痛く肝を冷やし面目丸つぶれとなったが、在種本人こそが、誰よりも心外のあまり啞然とした。

三月十四日の晩、雨の中を呆然と勘解由小路邸に戻ってきた在種を待ち受けていたのは、怒髪天を衝くばかりに怒り打ち震える義父在富だった。在種はおののきのあまり、何も言葉が出なかった。

在富は戦慄する拳で杖を握り絞め、六十二歳の老体を力の限り振り絞り、地も鳴る勢いで在種の顔面を打

ち据えた。在種は抵抗なく打ち飛ばされ、雨濡れた門前の石段に背中から倒れこみ、数段転げ落ちた下の地面で仰向けに横たわったまま小さく震え悶えた。在富はそれを放って、息を荒らげながら屋敷の奥へ戻っていった。

「殿、さすがに堪忍して給わりませ……」

「構わぬ、放っておけ。一晚くらい頭冷やせばよい。なに、死にはせぬ」

在富は家人の心配をはねのけ、

「手助けなどしたらお前たちも容赦せぬぞ」

と強く命じた。雨音が強まる夜であった。

在富としては目一杯の仕置きのもりであった——のだが、不運なるかな、よほど打ち所が悪かったのだろう。明るる朝、在種は濡れねずみで、昨晚のまま門前の石段下に倒れていた——息を失い、冷たくなって。

「在種、在種よ！ すまぬ……起き上がれ、在種！」

顔面蒼白で「それ」を揺さぶる在富。しかし、明らかに手遅れであった。

かくして、勘解由小路家を嗣ぐはずであった養子^う在種は、三十一歳の若さで、伯父にして義父である在富の手により「横死」という、非業の最期を遂げた。貴重な跡取りを、ほんのふとした出来事から、在富は水泡に帰してしまったのであった。

・在種は実在の人物。その父在康が天文法華の乱で没したという点は架空。

勘解由小路家の新邸が吉田神社脇という点は架空。

・在種が義父・在富の手により「横死」という点は史実。在種の生年は十年早く設定。細かい顛末と描写は架空。

詳細は第一部末コラム参照。

十 山口大乱

「平和な山口」とたびたび語ってきたが、その「平和」とは、実は砂上の楼閣のようなもの——「平和ぼけ」と言ってしまうてもよいようなものであった。

天文十一年（一五四二）に大軍を率いて出雲国（島根県東部）の大名・尼子氏への遠征に挑んだ大内義隆だが、翌年二月に大内軍は総崩れとなり、大敗を期して帰還した。大内領内、山口近隣の村里は、負傷兵や帰らぬ人の遺族となった者らの嘆きが各地でとどろいた。

一方で義隆は、出雲での大敗から極端なまでに厭戦的になり、出雲遠征を主導した陶隆房^{すえたかふさ}ら武功派を労うどころか遠ざけ、文治派の寵臣・相良武任^{さがらたけとう}に政務を一任した。そして自らは、居館の奥手にこもって芸事や茶会などの道楽に没頭し、公家のような生活を送るようになり、領国の治政さえ顧みなくなってしまった。さらには敗け戦で負った多額の損失を埋め合わせるため、年貢の増徴を行った。ただでさえ嘆きに暮れる領民は、重い徴税でさらに苦しんだ。

かつての豪傑は、今やすっかり愚将に成り下がってしまったのだ。そして、大内領政の主導権を巡って、武功派の陶隆房・内藤興盛^{ないとうおきもり}らは文治派の相良武任を敵対視するようになり、山口に不穏な影が落とされていた。

天文十九年（一五五〇）になると、相良武任と陶隆房との対立が決定的となり、武任の暗殺が謀られたが、事前に察知した武任は義隆に密告して難を逃れた。しかしこの頃から、隆房が謀叛を起こすという噂が大内領内の各地で流れるようになった。

そして、その時は来た。時あたかもザビエルが豊後へ旅立ってほどなくの天文二十年（一五五一）八月二十日、陶隆房は内藤興盛らと共に挙兵。まずは大内領の東の要衝、安芸国の巖島^{いつくしま}（宮島）とその対岸の桜尾城を落とし、山陽道を制圧した。

この明らかな謀叛の挙に対して、義隆の態度は何とも悠長なものであった。二十三日には豊後大友氏からの使者を接待する酒宴を続けており、運命の日の前日・二十七日に至っても能の興行などに耽っていた。

「運命の日」八月二十八日。陶隆房率いる叛乱軍は東方二方向から、すっかり平和ぼけに耽っている山口の街に、破竹の勢いで侵攻した。「陶隆房軍山口へ向け進攻・防御隊壊滅寸前」の報が届いてようやく危機感を覚えた義隆は、大内氏館・築山館を出て、高嶺山麓こうのみねの谷間にある法泉寺に退いた。義隆に味方した家臣はわずかで、兵力も二、三千人ほどしか集まらなかった。

継室のおさいの方こと大宮佐井子は、山口の北東側・宮野の妙喜寺に逃れた。これを聞いた大宮伊治は、娘を追って山口宮野へ向かって屋敷を飛び出た。

「殿、宮野の方は敵方の本隊がおります……危のうござります」

「なるものか、おさいはわしが命を懸けてでも守る！ 命を捨てる覚悟がある者のみ、共に従うがよいぞ！」

宇治丸ももちろん、物心ついてからほとんど顔を合わせたこともないとはいえ、実母の身柄が気になった。また何より、祖父にして養父である伊治に従う心積もりだった。

まだ見ぬ父の別れ形見として渡されていた、曆道の書と式盤をしかと懐に抱き、大宮家の一同とともに走り出した。しかし――

「痛っ……！」

逃げ道の道中で、広が躓き転んでしまったのだった。

「広！ 大丈夫！？」

「ええ、これくらい平気よ……っ、いたた……」

先陣を切る伊治と、我先に逃げ走る家人たちは、振り返り気づくこともなくわずかな間に走り去って行き、宇治丸と広の二人は取り残されてしまった。

(どうしよう……八幡様、神明様、天主様……あっ！)

走り行き交う街の大路で、一心に祈っていた宇治丸は、ふと思い立った。

「広、大道寺なら近いよ！ 負ぶさって！」

「ちょっと……おじ上様とおさい様はいいの？」

「大丈夫、祖父上様おじうえならきっとなんとかなるよ。それより今は、僕たちが無事逃げるのが一番大事だ！」

「……分かった、宇治丸を信じるわ。肩を貸してくれるだけで平気、自分で走れるから」

「僕じゃなくて、天神地祇と……天主様を信じてみよう！」

片足をやや引きずった広の肩を組んで、宇治丸は「南蛮寺」大道寺を目指して走った。

大道寺の近くまで来たところで、伴天連とそれに続いて脱出を試みる信徒たちの一行が見えた。

「伴天連様！ どうかお助けを……！」

「おお、君は京の天文学者の……」

山口を任されていた伴天連・トーレス司祭は、二人の顔をしかと覚えていてくれた。

「ジョアン、薬箱を！」

「へいさ！ 君ら大丈夫かい？」

同い年くらいのキリシタンの少年が同行しており、薬箱とともに医者を呼んできた。すぐに広の応急処置を施し、共に海の方へ向かう道を急いだ。

「広、大丈夫？」

「ええ、お陰でだいぶん楽になったわ。それより、大宮のおじ上様は……」

「大丈夫、きっと大丈夫だよ。それよりも、広の母君・広徳院御新造様が心配だね……」

「お母上、なのかな……一度も会ったこと無いけど、そうね、きっと大丈夫よ」

「うん、大丈夫だね、きっと……」

後ろ髪引かれる思いの広をなだめつつ、宇治丸は何よりも自分にそう言い聞かせ奮い立たせた。

「君ら公家の子なんだって？ おいらは案じるものなんてなんもねえから、平気さ」

「そうか、独り身なのか……気の毒に」

「お気の毒ね……」

ジョアン少年と道すがら語り合う宇治丸と広。途中何度か軍の詰問を受けたが、遊行僧^{ゆぎそう}とそれに従う衆徒であると説明して難を逃れた。宇治丸と広も、偽装のため装束を背袋にしまつて僧衣をまとった。

「なあに、庶民なんてなあみんな大概そういうもんさ。それより、君らこそ気の毒だな……おやじさんとおふくろさん、無事だといいいんだが」

「心配ね……天主様……」

「そうさ、俺らには天主様がついておられる。きっと大丈夫さ！」

「そうだね。天主様のお助けがあって、僕らこうして生き延びられたんだ」

この「キリシタン」の群れにあつては、生まれの身分は関係なく、みな家族なのだ、と伴天連が言っていたとおり、三人もすぐに打ち解けて話す仲となった。

「了齋殿も、くれぐれもお気をつけて……お手を」

「おお、かたじけのうござります。声と杖で大体はわかるのじゃが、段差があると危のうで……」

一行の中には、かつての琵琶法師・ロレンソ了齋もいた。彼とも二人は打ち解けた旅仲間となった。

「これは私めの私見にござりますが――真言密教では大日如来こそが本初にして普遍万有の宇宙の真理であり、釈尊もまた人間としてこの世に生まれ給うたのは一刹那なれど、その本性は釈迦如来として大日如来と本性一体にして久遠なる存在、と説きます。父なる神は大日如来、子なる神は釈迦如来に喩えられましょう。しかして聖霊なる神は、仏の慈悲の象徴にして永遠なる命の源たる阿弥陀如来に喩えられましょう」

彼はさすがは元琵琶法師、説法がうまく、卑近なたとえ話から、キリスト教と仏教教理との類似性など高度な話まで、日本人に分かりやすい巧みな講話で道中の一行を飽きさせず、かえって励まし元気づけた。

こうして五時間ほどの道のりを歩き通し、晩には無事港町秋穂まで逃れ、翌朝にはザビエルの滞在する豊後府内へ向けて船出した。危機一髪、奇跡の脱出劇であった。

二十八日の夕刻頃には、叛乱軍はいともたやすく山口の中心部を制圧し、空となった大内氏館や周辺の近臣邸は火をかけられ、宝物を略取された。火の手は山口の街に燃え広がり、「平和」な砂上楼阁は一夜にして阿鼻叫喚の地獄絵図と化した。

京より下向していた公家も多数殺傷された。十三年前に在富と京へ戻る旅路を共にした持明院基規も、この時再び山口におり、手につけられた。彼は特に、首を半分だけ斬られた生殺し状態で放置された末に事切れるという無惨な最期だった。義隆を取り巻いていた公家達は、謀叛を起こした武断派の憎悪を買っていたのだった。

そして、宇治丸の祖父にして広と二人の養父・大宮伊治も、二人と別れて宮野の娘の元へ向かった末、叛乱軍に捕まり、その手にかかって命を落とした。しかし、伊治の最期の嘆願が聞き届けられて、おさいの方こと大宮佐井子は助命された。命懸けで娘を守りきったのだ。

法泉寺の大内義隆軍は逃亡兵が相次ぎ、翌二十九日には山口を放棄し、山口から峠を越えて北西にあたる長門（山口県北部）の港町・仙崎に逃れた。ここから海路で、縁戚に当たる石見国（島根県西部）の大名・吉見氏を頼って脱出を図ったが、嵐のために逃れることはできなかった。仙崎に引き返した義隆らは、そこから少し山手に入った長門深川の大寧寺に籠城したが、四方を追手に囲まれてしまった。命運尽きた義隆は、翌九月一日（この年の和暦八月は「小月」で、二十九日が晦日であった）に大寧寺で自害した。さらに翌日には捕らえられていた義隆の子にして、佐井子の第二子・宇治丸にとって異父弟、広にとっては異母弟にあ

たる、わずか七歳の大内義尊も殺害された。

大寧寺まで逃れた義隆勢はわずかであったが、その中には共に逃れた公家衆もいた。元関白にして当代関白の父・二条尹房これふさとその次男良豊これとよ、前左大臣三条公頼きみよりは、長門大寧寺まで逃れたが、義隆と運命を共にした。摂関家という最高位の公卿まで遠く西国の山村であえなく討ち殺される、まさに乱世「戦国」の世の無情さを象徴する事件であった。

これが世に云う「大寧寺の変」の顛末。山口大内氏三代の栄華は、わずか三日にして夢の過ぎ去るように潰えた。三代目義隆の晩年はまさに砂上楼阁であり、それは蜃気楼のように儚くも砂へと帰ったのだった。助命された義隆の妻にして、宇治丸の母・大宮佐井子と、広の母・広徳院御新造こと広橋光子は、その後山口で尼となり、日夜戦没者の弔いに勤めた。

- ・山口大乱の顛末はほぼ史実。
- ・宇治丸と広の脱出エピソードは架空。
- ・ジョアン・デ・トーレスという少年が山口から豊後府内へ救出されたという記録があり。

十一 十字架を負った少女

天文二十年（一五五一）九月頭、豊後府内のザビエルに与えられた顕徳寺・天主堂に到着して、ほっと肩を撫で下ろしたトーレス一行であったが、山口大乱の顛末を知らされた宇治丸と広は啞然とした。

「おじ上様も、お父様も、亀童丸も、持明院様も、二条様も、みんな死んでしまったのね……みんな……」
特に、広の心的外傷トラウマは病的なまでにひどかった。日夜涙をこぼし、その涙も枯れて目の輝きを無くしてしまった。

「祖父上様の最期は立派だったそうだよ……自らの命を犠牲にして、おさい様——母上の命を守った、って……」

「そんな、そんなの嫌よ……！ どうしてこんなことに……私が転んだりしなければ……」

実の母方祖父を亡くして誰よりも辛いであろう宇治丸も、必死に広を慰めるが、それは耳にこそ入っても、心の奥のとげまで取り去ることは容易ではなかった。

物蔭からその様子をじっと見ていたジョアンは、ザビエルとの会見が終わって司祭館から出てくるのを待って、トーレス司祭を二人の元へ連れてきた。数ヵ月の日本滞在で、博覧強記なトーレスは日本語をそつなく話せるようになっていた。

「この度はまことにお気の毒に……心中お察しします」

「トーレス伴天連様……伴天連様、うぐっ……」

広はなりふり構わずトーレスの膝元にしがみついて泣き噎むせいだ。

「人は霊を支配できぬ。霊を押しとどめることはできぬ。死の日を支配することもできぬ。何事にも時があり、天の下の出来事にはすべて定められた時があります。生まれる時、死ぬ時、植える時、刈り入れる時。愛するに時があり、憎むに時があり、戦うに時があり、和らぐに時があるのです」

トーレスは、広を抱き上げると、慈しみ深い目を注ぎ、続けた。

「天主様は全てを時宜に適うように造り給うた。そのみ業は皆その時に適って美しい——また、主の慈しみに生きる人の死は主の目に価値高い。その者の労苦は憩いとなり、その行いは永遠に報われるでしょう」

「伴天連様……」

広は伏せていた顔をようやく上げると、涙を一杯に湛えた眼で、トーレスのまなざしをじっと見つめ返した。

「我は蘇りなり、命なり。我を信ずる者は、死してなお生くるなり——と、耶蘇様は仰せになりました。どうでしょう、広殿。このみ言葉を信じてみませぬか？」

広は拭ってもなお涙に潤った目で、トーレスをしかと見つめて、手のひらを取って握りしめ、頷いた。
「お慰め、まことにありがたく……はい、今直ちには参りませぬが、み言葉をしかと心に留め、信じてみます……！」

トーレスは慈しみ深い微笑みをたたえて、広の手を握りかえした。

『“Emmanuel”——主我らと共に坐す』。この言葉を、どうか忘れないでください。慈しみ深き主の平安が、いついかなる時も、常に我らと共に在らんことを—— Dominus vobiscum, 主汝らと共に坐す」

胸元で十字を切るトーレスに続き、広と宇治丸は辿々しい手つきで、そして蔭のジョアンも手慣れた手つきで、みな自らの胸元に十字を切った。

「主我らと共に坐す——」

宇治丸も、トーレス司祭の言葉を反芻した。

「Requiem aeternam dona eis, Domine, et lux perpetua luceat eis. ——主よ、とこしえの安息を彼らに与え、絶えざるみ光もて照らしたまえ——」

山口大乱のひと月後、死者を弔う鎮魂祭の中で、広は洗礼の儀を受けて、キリシタンとなった。

「神に愛されし娘カタリナ・ヒロよ。父と、子と、聖霊の御名によって、今汝に聖なる洗礼を授く——」

洗礼名は「カタリナ」。古代エジプトの聖女で、高官の娘に生まれ高い学識を持ちながら、全ての誉れで自分を超越する男でなければ結婚しないと宣言。その後隠修士の導きでキリストの教えに入り、数々の迫害と計り知れない責め苦の末に殉教するが、夢の中で聖母マリアの導きによって耶蘇＝イエス・キリストと婚約したという人物である。そこから名を授かった。

「トーレス伴天連様……キリシタンとなった暁には、日本の神仏を拝んではならないのでしょうか？」

広の洗礼式が済んでのち、宇治丸はかねがね思っていた一つの疑問を訊ねた。

「天主様こそがあらゆるものをはるかに超えた万有の主である、という理^{ことわり}を忘れさえしなければ、寺社に詣ろうとも、神事・法要に参拝しようとも、主の御心に違^{たが}うことはありません。主は人の行いの形よりも、まことの心こそをご覧になります。つまるところは、それぞれの者の心の置き所次第です」

「そうですか、ほっとしました。僕達二人とも神社に生まれ、幼い頃から神道を学んできた身ゆえ……ことに、僕は陰陽師の子、京にて跡取りとならねばならぬやも知れぬ身ゆえ……」

慈しみ深く答えるトーレスの言葉に安堵しつつ、宇治丸は天主の助けに与りながら、広を残して自らは洗礼を受けられないという後ろめたさを告白した。

「風は思いのままに吹く。その音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを人は知らぬ。今はまだ時が満ちていないのでしょうか。もしも、いずれの日にか再び天主様のお導きがあったなら、また戸惑うことなくおいでなさい」

「はい、いつの日にかきっと……！」

宇治丸は、今こそ京へ戻って父の跡継ぎとして対面すべき時であると考え、洗礼は見送った。そして、京への海の窓口・堺の港へと行く船の手配を伴天連に依頼した。広もこれに同行を決意した。

トーレスの言葉を聞いて安堵した宇治丸と広は、宇治丸の生まれの地にして二人の学業の場であった山口今八幡宮を思い起こしつつ、最後に豊後府内の鎮守社・若宮八幡社に詣で——

「これに坐す八幡大明神の御前に畏^{かしこ}み畏^{もう}みも白^{しろ}く、この度は天主様と共に、広き篤^{あつ}き恩^{おん}頼^{たの}みを給^{たま}わりし事をかたじけなみまつり……」

それからほどなく、港へ向かって船出の仕度に着いた。

「宇治丸殿、この本はそなたに差し上げましょう」

トーレスは、一冊の洋書を宇治丸に渡した。それはきれいな活版で印刷され、図解がたくさん入った、天

文学の初歩的解説書であり、洋書ながら日本人通訳が書き込んだであろうたくさんの和文の註解が入っていて、宇治丸にも十分読めるものであった。

「これは……ありがとうございます、大切に拝読いたします！」

「立派な天文学者になるのですぞ」

「はい、精進いたします！」

「広殿も、今度は宇治丸殿のために日々祈り、たとえキリシタンの集いから離れていようとも、いかなる困難があろうとも、主のみ恵みとお導きを感謝し信じて依り頼み、共に助け合うのですぞ」

「はい、慎んでお言葉心に留め——天主様のみ助けによりて精一杯努めます！」

宇治丸と広はトーレス司祭と固く握手を交わすと、船に乗り込んだ。

「宇治丸、広、達者でな！」

「不肖了齋の夢は、ザビエル伴天連様が果たせなかった再度の上洛と宣教公認を果たすことにござります。その折には何卒私めを思い出してくださりませ」

「旅路に主の導きと平安の豊かにあらんことを——主、汝らと共に坐す」

「また、汝の霊と共に坐す——カタリナ広、行ってまいります！」

「まことにありがとうございました！ 宇治丸行ってまいります。皆様も御達者で！」

かくして、ちょうど豊後から一路堺へ向かう大型貿易船に便乗を許され、トーレス、ジョアン、了齋らに見送られつつ、豊後府内の港を旅立っていった。

- ・本章は架空。
- ・「人は霊を支配できぬ…～全てを時宜に適うように…」——コヘレトの言葉 8 章 8 / 3 章 1～2、11。
- ・「主の慈しみに生きる人の死は…」——詩編 116 編 5 / ヨハネの黙示録 14 章 13。
- ・「我は蘇りなり、命なり…」——ヨハネによる福音書 11 章 25。
- ・「風は思いのままに吹く…」——ヨハネによる福音書 3 章 8。
- ・「主、汝らと共に坐す/また、汝の霊と共に坐す」——ミサ中の司祭と信徒の応答。

十二 上洛・父との対面

豊後から瀬戸内の海路をはるばる越えて、宇治丸と広は遠く堺の港に着いた。

「わあ、とっても大きくて立派な街ね！」

「そうだね、山口の街が顔負けするほどに大きな街！」

当時、堺は京へ向かう要衝の港町として、自治都市の体を為し、荒廃した京の都に代わって大いに栄えていた。

「これはこれは、ようこそおいでくださいました。先年ザビエル殿の上洛の折にもお供^{つかまつ}りました者でございます」

「どうも、初めまして。賀茂^{かもの}宇治丸と高嶺^{こうのみね}広にござります。こちらこそお世話になります」

二人は、ザビエルも世話になった堺の豪商・日比屋^{ひょうけい}了瑠^{りょうろう}に出迎えられ、堺の街でひと月ほどを過ごしたのち、いよいよ京の都へ向かった。

「天下の京の都とはいっても、ずいぶん荒れた街だなあ……」

「広さはともかく、山口のほうがよっぽど綺麗な街だったわね……」

相次ぐ動乱と疫病の流行などで、京の都・ことに庶民の住む下京^{しもぎょう}はすっかり荒れ果て、半壊した廢屋と病や飢えにあえぐ人々、そして大路小路には物乞いやごろつきなどがたむろするばかりであった。すでに季節は冬となり、冷たく吹き付け砂煙を巻き上げる木枯らしが、街の寒々しさをいっそう引き立てていた。

上京かみぎょうに至るとそれもいくぶん解消したが、立派な建物は物々しい警備に囲まれた武家屋敷ばかり。公家屋敷は構えこそ大きくても、屋根の檜皮ひわだの葺き替えもままならず、苔むしたままに軒を連ねていた。そして、飢えた物乞いや浮浪者を警護の武士たちが非情にも蹴散らす姿が見られた。

了珪が付けてくれた部下の隊商も、寄ってくる物乞いを鞭で追い払ってゆく。宇治丸と広は心苦しかったが、自分達の身の安全を守ってくれているのだ、仕方がないと諦め、目を背けた。

「このあたりまで来ればもう安心でしょう。それでは私めは、商談がござりますので、こちらにて」

「はい、遠路ありがとうございます」

二人は上京の鴨川河辺・河原町荒神口こうじんぐち付近で隊商と別れて、京の東の郊外・東山の吉田神社門前にあるという勘解由小路邸へと向かった。

身寄りの者が塚におり、これから京に遣わす——とだけ知らせを聞いていた勘解由小路在富だが、もしやと思いついて、そわそわと到来を待ちわびていた。

吉田神社に到着した二人は、勘解由小路邸の場所を訊ねるべく境内にいた神主に話しかけた。

「これはこれは、勘解由小路殿の……来られたら便りを遣うよう承っておりますで、しばしお待ちを」

神主げにんは下人を遣わした。しばらくすると、下人は急ぎ足で戻ってきて、その後ろから狩衣烏帽子姿かりぎぬえぼしの老人が現れた。二人もその方へ駆け寄っていった。

「勘解由小路殿にござります」

神主と下人は、それを見届けて去った。

「それがし宇治丸と申す者にござります。こちらは広。山口より馳せ参じてまいりました。ご無礼ながら、勘解由小路在富殿にござりますか？」

「左様。知らせは聞いておるが、そなたは——」

思い当たる年頃と場所の少年少女であることを見て、声を震わせながら訊ねる在富。そこで宇治丸は、大切に懐に持ってきた袱紗ふくさをその場でひもとき、曆道の書と式盤を取り出した。

「おお、これは……そなた、大宮佐井子の子か……我が息子なのか！」

「左様にござります……お父上、お会いしようござりました！」

打ち震える手を恐る恐る伸ばして、在富は書と式盤を受け取り、それを確かめるとその場に思わず投げ落として、宇治丸の手をしかと握った。時に在富六十二歳、宇治丸と広は数え十三歳であった。

しばし我を忘れて見つめ合ったのち、宇治丸は気を取り直し、後ろの広を紹介した。

「そして、こちらは広橋光子殿と亡き大内殿の娘——八つの歳から、亡き大宮伊治殿の御邸宅にて共に育てられた幼馴染みにござります」

「おお、広橋殿と大内殿の……」

「初めてお目にかかります、広と申します」

在富は今度は広の顔をじっと眺めた。

「ああ、広橋光子殿によく似ておる……二人とも、よくぞ生き延びてやってきたのう」

「はい。まことに無念ながら、大内殿も大宮殿も……」

しばしの感嘆に浸っていた三人だが、在富が気まずそうに顔を背けた。

「急なことであったもので、済まぬが今すぐに屋敷へ迎えることはできぬ……そうじゃのう、山科殿やましななら何とかしてくださるやも知れぬ。手紙を持たせるで、しばし屋敷の外で待っておれ」

こう言って三人は勘解由小路邸の手前まで来ると留め置かれ、しばらくすると在富が手紙を持って戻ってきた。

「上京に山科言継殿やましなときつぐという見知った公卿がおわす。道のりと殿への手紙をしたためたで、これを持って行くがよい。くれぐれも宜しくお伝え申し上げてくれ」

こうして在富は、そそくさと邸内に戻ってしまった。

「殿、いかがなされましたか」

「いや、小用じゃった。ところで、遠方に手紙を遣わす用が出来た。手配してくれ」

在富にとってはまたとない喜ばしき僥倖であったが、正室のいる手前、正式な対面は周到に行わなくてはならない。正室木根子は良家の育ちである分、気位が高い女房閑白であった。言いつくろいの言葉をあれこれ考え巡らせたが、やはり喜びの心がふつふつと湧き上がってくる。義理の養子をうっかりと撲殺してしまい、これでいよいよ跡取りがなくなってしまった、と落胆に暮れていたちょうどその時であるから、なおさらのことだ。

（宇治丸、と申したか……よくぞ育て戻ってきた、我がただ独りの息子よ――）

宇治丸と広は、在富の指示通り、上京へ戻ると山科邸を探し出し、恐る恐る門戸を叩いた。しかし、中級公卿の屋敷にしては呆気ないほどすぐに、屋敷の中へ通された。

そしてもう一つ驚きには、山科邸の内部は怪しい辻易者も顔負けするほど、そんじょそこいらに怪しげな護符・靈符たぐいの類や、干からびて吊された生薬、薬壺やげん、薬研などが並んでいる。公卿の邸宅とは思えない、何とも胡散臭い屋敷であった。

「あや、これは愛らしい坊やお嬢よのう。どうしたのかね、塗り薬か、飲み薬か？」

夕暮れ前から酒焼けた赤ら顔で出迎えた酔っぱらいの恵比寿顔、彼こそが山科言継四十三歳（一五〇七～一五七九）であった。

「いえ、突然でまことに恐れながら、しばしの宿をお借り申し上げたく……これを」

「ほう、勘解由小路殿の頼みとあってはやぶさかない。どれどれ」

酔っぱらってふらつきながらも、在富から託された手紙をひもとき読む言継。そして、次第に酔いが覚めるように驚き顔になった。

「なんと……そなた、在富殿の落とし子とな！」

そして、がばっと立ち上がると二人に詰め寄り、まさに恵比寿の面のような満面の笑顔を浮かべ、二人の肩を抱いてもみくしゃに撫で回しつつ大声で笑い立てた。

「そしてお嬢は大内殿の遺児とな！ ぬあっはっはっは、これはめでたい、今宵は宴じゃ！ これ、ありったけの酒を持って参れ～！」

「ともかく気さくそうなお方で良かったね……」

「そうね……ちょっと心配だけでも」

酒の銚子を踏ん付けて文字通り笑い転げながら床をばんばんと叩く言継に、二人はくすくすと微笑みを交わした。

・本章は架空。山科言継という人物とその人柄等は記録通り。

十三 認められぬ落とし子

こうして一時的に父・在富の知り合いであるひょうきん公卿・山科言継の邸宅に居候することになった宇治丸と広。言継は突然転がり込んできた二人を、我が子のように手厚くもてなしてくれた。在富との信頼関係の篤さが伺われる。この時の言継の妻（二番目の妻・継室にあたる）は、在富の末娘にして宇治丸の姉に当たる阿多子二十六歳であった。

言継はひょうきんなだけではなく、しっかりした学徳のある立派な公卿で、朝廷でも幕府筋からも信頼篤かった。また、実にお人好しで、趣味の薬学が高じて来る者来る者に薬を施し、貧しい者からは謝礼も受け取らず、上流階級から庶民に至るまで広く慕われていた。

二人も、言継に薬学を習いつつ、薬を求めてやってきた客の接待や看病に励んだ。しかし、在富からの連

絡はなかなか来なかった。

ふた月ばかりが経ち、年が明け、松の内も明けた頃。ようやく山科邸宛に、在富からの手紙が届いた。二日後に装束を整えて勘解由小路邸へ来るように、とのことだった。

二人は山科言継から上等の公卿稚児装束を借りて、山科家の牛車に乗り、緊張を抑えつつ吉田山へ向かった。

「この童^{わらわ}が殿の落とし子にござりますか」

やはり、在富の正室・木根子は、険しい態度であった。

「今まで黙っていて面目なかった……確かにわしの息子に相違ない」

「これが証拠の品にござります」

宇治丸は、確かに在富の筆跡で、山口下向から帰る直前の年月日と、大宮佐井子に我が子とこの品を託す旨を巻末に記した曆道指南書、そして式盤を見せた。

「これは確かにわしが山口で別れ形見として託したものじゃ。そして、山口に手紙を遣って問うた結果、先日大宮佐井子からも、確かに我が子であるとの返事があった」

「左様ですか。よくぞ先の合戦から逃れてまいりましたわね」

木根子の言葉は、二人の子供を労う口調ではなかった。そして、見定めるような目線で二人を眺めた。

「して、こちらのお嬢様が、大内殿の」

「は、はい。広と申します……」

鋭い視線を向けられて、広は肩をすくませつつ答えた。

「分かりました。殿も先頃在種を亡くして御傷心でしたから、さぞお喜びのことでしょう」

「ううむ……」

嫌味を込めた口調で語る木根子に、あの在富までもが肩をすくませた。

「しばらく考えさせてくださりまし。それまでは、山科殿も御厄介でしょうから、吉田神社で奉仕でもしておいでなされ。殿、それでよろしゅうおますか」

「そうじゃな……そちら山口でも吉田神道を学んでおったと聞く。足手まといにはなるまいな」

在富としても、二人が山科邸でちやほやされるよりは、吉田神社奉仕で境遇が多少厳しくなっても、将来跡取りとなった時に少しでも修学の経験があったほうがよかろう、また近くにおれば自ら教鞭を執る機会もあろうと考え、妻・木根子の提案を呑んだ。

「かしこまりました。非力ながら精一杯奉仕してまいります」

二人もこの裁断を承服し、山科邸に戻ると在富から預かった謝礼品を言継に渡し、心からの礼を告げた。

「神社奉仕か、心配じゃのう。せめてもう少し春温まってからでもよかろうに……辛くなったらいつでも戻ってきて良いのじゃぞ」

「ありがとうございます。大丈夫、神社奉仕なら慣れておりますから。長らく本当にお世話になりました」

戸口まで出てきて見送る言継を背に、二人は発っていった。

・本章は架空。在富の娘が山科言継の継室という点も架空。

十四 嗣子認定

吉田神社での住み込み修行は、厳しくもあったが、宇治丸と広にとって充実した時だった。なにせ、今まで学んできた吉田神道の総本家である。三十七歳になった神祇管領長上・吉田兼右も、若き日の山口下向では在富に世話になった恩義と、宇治丸にとっては母方叔父にあたるという縁故もあって、熱心に二人に吉田

神道の伝授を施した。そして、時に父・在富も訪れ、陰陽道の指南をつけた。

また、年頃に育つにつれて、二人は異性として意識しあい、恋い慕う仲となっていた。

しかし、嗣子^{しし}、すなわち跡取り息子としての認定はなかなか得られなかった。木根子はあくまでも素性の明らかな京生まれ京育ちの公家の子を求め、親戚、姻戚、知古を巡り巡って養子の宛を必死に探した。が、裕福な上・中級公卿は格下で専門職の勘解由小路家に大事な子を遣ることをよしとせず、下級公家や地下家^{じげけ}は養子に遣るような子をたくさん育てる余裕などなかった。賀茂氏嫡流は在種とその父在康が没して勘解由小路家だけとなっており、遠縁で奈良を拠点とする賀茂氏分流・幸徳井家もまた、貧困のため余分な子などいなかった。天文法華の乱を生き残ったもう一人の娘・日枝子が継室として嫁いだ先・土御門家に至っては、ライバル関係である上に、都の乱を逃れて所領の若狭国（福井県西部）の山あいの片田舎^{なたしょう}・名田庄に長らく引きこもっており、京の朝廷に出仕することもなかった。

二人が吉田神社に預け入れられてから一年半ほどが経った天文二十二年（一五五三）九月、在富の正室・木根子は独断で山科言継に、その三男で数え七歳になる鶴松丸を養子に取ることを要請した。この子の母は在富の末娘・阿多子であり、在富にとって外孫、宇治丸にとっては甥にあたる。言継邸に世話になっていた時には、二人によくなついていた子だ。

さすがの言継にとっても、この要請は無茶振りであった。

「鶴松丸はまだ幼すぎて、跡取りには到底無茶な話、足手まといにさせてしまうだけでござりましょう……それに、実のお子・宇治丸殿もおいでにござります」

言継は鄭重に断りを入れた。我が子鶴松丸の身もさることながら、宇治丸の身の上を^{おもんばか}慮^はってはもつともなことであった。

なお、この子は後に、橘^{たちばな}氏末裔唯一の堂上公家であった薄^{すすき}家の養子として跡を嗣ぎ、薄^つ諸^{すすき}光^{みつ}（一五四七～一五八五）となったが、豊臣秀吉の怒りを買って自害させられた。

ここに至って、木根子もついに根負けして、宇治丸を嗣子として勘解由小路家に迎え入れることを認めた。宇治丸も広も、持ち前の利発さを遺憾なく発揮して、砂が水を吸うようにもりもりと勉学・修行に励み、立派な陰陽師と巫女に育っていた。専門的家学を持つ下級公家にとっては、家の体面よりも実力が重視される。もはやこの二人をおいて他に跡取りはいない、体面に拘り続けては家の存亡にかかわる——と認めざるを得なかった。

年が明けた天文二十三年（一五五四）正月、宇治丸は数え十六歳にして正式に勘解由小路家の嗣子と認められ、元服の儀を執り行った。烏帽子親は山科言継。そして諱^{いみな}は在昌^{あきまさ}と名付けられた。賀茂在昌朝臣^{かものあきまさあそん}・勘解由小路在昌^{かでのこうじあきまさ}の公的誕生である。

そしてふた月の後、弥生の晴れ空の満開に華やぐ桜の元、在昌と広は祝言を挙げ、夫婦^{めおと}の仲となった。

「広——これからも、未永く、よろしく！」

「ええ、こちらこそ。未永くよろしく願います——在昌殿！」

- ・在富の妻が山科言継の三男を養子にと要請したことは記録にあり。
- ・鶴松丸＝薄諸光という点は恐らく事実。

【第一部 解説コラム】

賀茂在昌は、史書によると慶長四年（一五九九）八月、「八十一歳」にて没と記されている。しかしこれの通りだとすると、（そして大前提として、実は諸説定まらないが敢えて「賀茂在昌＝Manoel Aquil Marza」だと比定すると、）在昌がキリシタンとなったのは永禄二年（一五五九）四十一歳、豊後府内の教会で修学

するため京都を出奔したのは永禄七年（一五六四）四十六歳、その道中で翌一月に次男が生まれ、長男「十一歳」を修道士として献げたとあるので、数年で考えると長男の生まれは三十七歳の時、そして恐らく京都に戻って家督を継ぎ、「従五位下に叙せられた」と朝廷の記録に初登場するのが天正五年（一五七七）五十八歳——となってしまふ。従五位下というのは公家としては初段的な位階であり、この歳まで——一度はキリシタンとなって出奔したとはいえ、キリシタンになった四十一歳まで、何のキャリアもなかった（記録にないだけで従五位下未満に叙せられていた可能性はあるが、公家でその歳としてはノーキャリアと一緒にある）というのは、極位正二位まで昇った勘解由小路在富の息子としては非常に不自然であるように思われる。

さらに、在富の甥にあたる在種が従五位下に叙せられた（恐らくこの年に在富の養子として迎え入れられたのではないかと考えている）のは天文八年（一五三九）・在昌二十一歳の時、ということになってしまう。成人した嫡男を差し置いて甥を跡継ぎ養子として迎え入れるであろうか。ここで注意していただきたいのは、これは在昌がキリシタンになるより「二十年」も前のことである。さらに、在種は従五位下に叙せられたという記録（＝恐らく在富の養子となった）から「十二年後」の天文二十年（一五五一）に死亡している。実子がキリシタンになってしまったため仕方なしに代替として甥を養子として迎え入れた、というシナリオは全く成立しない。

これらの不自然さから、本作品では在昌は「六十一歳」没との誤りである、という独自説を取り、各時代での年齢を二十歳繰り下げている。これによって、在昌の誕生は天文法華の乱の三年後、ザビエル一行が山口に初来訪したのは数え十二歳の時、というタイムラインができる。そこから着想を得て想像を膨らませていったのが、天文法華の乱のち在富が山口に下り、そこで子を儲け、その子が少年期まで山口に育ち、ザビエル来訪を目撃して感銘を受け、のちにキリシタン陰陽師になる端緒となった——というストーリーである。そう考えると不自然さが解消されて全ての辻褄が合い、タイムラインとして自然、かつドラマチックな物語が浮かび上がってくる、というわけである。

また、第九章で一瞬出てきて瞬時に死んでしまった非業の養子・在種は、史料では二十一歳で在富の手により「横死」（これは史実なのだ！）したと伝えるが、これを信じると別の史料では数え九歳にして従五位下に叙せられたことになってしまう。最上流公卿の家柄ならともかく、これまたいささか不自然であるように思われて、本作では十年繰り上げて三十一歳没という設定にした。そして、「横死」の理由は謎であったところ、偶然か必然か、ちょうど同日にあのような動乱が起きていたことを知り、いきさつとして組み合わせてみた次第である。

なお、「おさい」（本作では佐井子）と「広徳院御新造」（本作では光子）は実在の人物だが生没年も本名も不詳、当然在富と佐井子の恋も仮想、「広」という人物は全く架空である。在富の正室・木根子も仮想の名・生没年も不詳であり、娘・日枝子、阿多子という人物も架空。実はその名は、設定上の生まれ年の干支から採っている。つまり、木根子は乙卯年生まれ・乙も卯も陰陽五行では木の陰であることから——日枝子は甲申年きのえさる生まれ・山の神であり猿を神使とする滋賀大津の日吉大社（別表記・日枝）に因んで——阿多子は丁亥年ひのとい生まれ・丁は火の陰・火伏せの神として知られ猪を神使とする京都嵯峨の愛宕神社（旧称・阿多古）に因んで——といった具合である。陰陽師の家系ならば六十干支ろくじっかんしから名を取るのはさもありなんと考え、以後登場する陰陽師筋の架空人物・仮想人名設定の多くもそのような法則で名付けている。

第二部 キリシタン陰陽師

一 キリシタン一行との再会

フランシスコ・ザビエルの初上洛から八年後の永禄二年（一五五九）和暦十一月、コスメ・デ・トーレス司祭に派遣されたガスパール・ヴィレラ司祭（一五二五～一五七二）率いるキリシタン一行が二度目の上洛を果たした。一行の中には、山口でキリシタンとなった元琵琶法師・ロレンソ了齋もいた。

無駄な軋轢を生まず日本人に受け入れられやすいよう、ヴィレラ司祭も含めて全員が仏教の僧侶のいでたちをして、四条坊門室町姥柳町うばやなぎぢょうに二ヵ月ほど滞在し、朝廷と幕府の公認を求めつつ細々と宣教をした。

これだけ配慮しても当然、この「異国の新宗門」に対してこころよ快く思わず、宗論を挑んでくる既存仏教勢力は大勢いた。

一行が上洛してまもなくのある日、真っ先に宗論を挑んできた血気盛んな法華宗の僧侶、光浄院という者がいた。

「一人の人間が本初万有の神と一体なる天主であるとは如何なることか、不遜極まりなきこと！」

「積尊とて、一人の人間として二千年ほど昔に現世に降誕し、八十歳にて涅槃を迎えながら、その本性は『久遠実成の釈迦如来』、太初に在り、今在り、世々に限りなく在るなり、と法華の宗門でも教えておられるではござりませぬか。それと一緒にござります」

ヴィレラの助言を受けつつ、ロレンソ了齋が問答に答える。彼は今や立派な宣教者となっていた。

「ぐぬぬ……ならば、もうひとつ聞きたい。地や太陽や月、星などは全て球であると荒唐無稽なことを述べておるようじゃが、これは如何なることか」

「光浄院様は如何ようにお考えにてござりましょう？ 地と月が球でなければ、いかに昼と夜が在り、月の満ち欠けが在ると？」

「地は方にして天は円、昼は日光菩薩がっこうぼさつ、夜は月光菩薩つかさどが司る。月の満ち欠けは……ううむ、そうじゃ。月光菩薩けんぞくの眷属に白黒十五人の天人がおわして、日ごとに現世と浄土を行き来しておるのじゃ！」

「なんとまあ……それはそなた様の思い付きにござりましょう……日光月光菩薩は太陽と月の恵みのあくまで『象徴』、十五天人云々に至っては、仏典にもそのようなことは記されておらぬと存じますが」

あまりに稚拙な問答に、了齋がいい加減辟易しつつあったその時。

「あなた様のような高德の御坊様から、かくのごとき不合理な虚妄をお伺いするとは、まことに遺憾でなりません……子供騙しにすらならぬおとぎ話、稚児からさえも笑いを買うこととなるでしょう」

「な、何をっ……？」

不意に、狩衣烏帽子に身を整えた一人の青年が、問答に割って入ってきた。

「伴天連様と了齋殿の仰せの通り、地とあらゆる天体は宇宙の虚空に浮かぶ球にござります。地は球にて一日で自転しているが故に太陽の日向と日陰なる昼と夜があり、一年で太陽の回りを黄道に合わせて公転しているが故に太陽との距離差から四季があり。月は太陽の光を浴びて輝くが故に夜のみ輝き、地球の周りを回っているが故に、太陽と地球とのちょうど向かいに月が来た時に新月が起こり、日ごとに地球の影が角度を変えて当たるが故に満ち欠けが出来るのでござります」

「な、何者じゃこの若造は……！」

法華僧は怯んで、相手の素性を問うた。

「正二位行陰陽頭しょうにいぎょうおんみょうのかみ・勘解由小路在富かでのこうじあきとみの息そく、正六位上行曆博士しょうろくいじょうぎようこよみはかせ・勘解由小路在昌あきまさにござります」

「な、なんと、陰陽頭の……き、今日はこれにて暇致す……！」

その名を聞くやいなや、法華僧は血相を変えて退散していった。

「おや、行ってしまわれた……せっかくの御宗論を台無しにしまいましたようで、失敬つかまつりました」

青年は苦笑を浮かべつつ、了齋とヴィレラに会釈した。

「あ、あなた様はもしや……」

驚き、しかし何か思い当たるように声をかける了齋に、青年は再び会釈しつつ答えた。
「覚えておいでにござりましょうか。山口の大乱の折にトーレス伴天連様のお導きで共に豊後へ逃れました、賀茂宇治丸にござります」

「おお、宇治丸殿……忘れるものですか、なんとお久しゅう！ この了齋、豊後の港にて別れ際に申した宿願が叶いて、このたび晴れて上洛いたした次第にござります」

そう。かの青年こそが、今や勘解由小路在昌二十一歳として立派に成長した、かつての宇治丸少年である。

・本章の記述はほぼルイス・フロイスの記録通り。在昌の官位は架空。

二 多難の嗣子

在昌と広の間には、結婚翌年の弘治元年（一五五五）十七歳の時に、晴れて長男が生まれた。山口から豊後に無事逃れたことを感謝して、豊後国なる八幡宮の総本宮・宇佐神宮に因み、宇佐丸と名付けられた。

しかし、在昌は非嫡出子という出自ゆえに、嗣子（跡取り）としての出世には支障があった。朝廷での官位昇進は、父在富と違ってはかばかしくなかった。

また、在昌は父に付いて学んでいくうちに、従来の陰陽道に対する行き詰まりをひしひしと感ずるようになった。

当時、^{みん}明国ではアラビア天文学を取り入れた精緻な大統暦が用いられていた。元代に造られた暦法で、三百年間も使い続けられているにもかかわらず、経年による誤差は僅かであった。

一方日本では、平安初期に導入された^{せんみょうれき}宣明暦が八百年近く、相も変わらず使い続けられており、そのままではとても使えた代物ではなくなっていた。賀茂勘解由小路家をはじめ、各地の暦師達は、^{かでのこうじ}経験の積み重ねに基づく超絶的な「家伝」によってそれを修正し、なんとか正確な造暦を行っていた。しかし、朝廷陰陽寮の造暦は伊豆三嶋など地方の暦師に対しても引けを取るものとなってしまうていた。陰陽寮の二大柱の一方・天文道の家柄^{つちみかど}・安倍土御門家は所領の若狭国名田庄に引きこもったきりであり、暦道の家柄である賀茂勘解由小路家は本来分担すべき天文道をも兼務せざるをえず、このままでは地方暦に対して朝廷の威信が揺らぐという切迫した状況であった。

にもかかわらず、在富は家伝を墨守するばかりの極めて保守的な姿勢で、在昌がトーレス司祭から授かってきた西洋天文学の書も一顧だにされなかった。在昌が跡を嗣がなかったら、賀茂家の暦道は断絶していたことだろう。在昌一代は良かろうにせよ、秘伝的・師資相伝的な家学に頼ったやり方では、先が見えている。広に付き添って南蛮寺を訪れるたびごとに、在昌はその危機感と、西洋天文学を学び本朝（わが国）の暦学に取り入れたいという思いを強くしていった。

・宇佐丸という名は架空。名の由来は本文中のいわくその他、生まれ年の干支から。卯年→兎→宇佐丸。

三 マノエル・アキマサ

了齋とヴィレラの上洛はふた月あまりとわずかの間であったが、その間、在昌と広は足しげく仮南蛮寺に通い、よしみを交わした。

在昌は、豊後でトーレス司祭から告げられた言葉をしかと思いに刻んでいた。

——もしも、いずれの日にか再び天主様のお導きがあったなら、また戸惑うことなくおいでなさい——。

そして、——『“Emmanuel”——主我らと共に坐す^{いま}』。この言葉を、どうか忘れないでください——。

伴天連に付いて西洋天文学を学びたいという動機ももちろんあったが、それ以上に、在昌はあの時果たせなかった、命を給うた主なる神への献身たる「洗礼」、すなわちキリシタンとなることに、此度こそはとい

う意を次第に強くしていった。

——我よりも父または母を愛する者は、我に相応しからず。我よりも息子または娘を愛する者は、我に相応しからず——

福音経のこの言葉も、在昌の胸に深く刺さった。

釈尊も、一遍上人も、家を捨て、己を捨てて、真理の道へと進み給うた。我はいかに——

永禄二年（一五五九）、ユリウス暦十二月二十四日、降誕祭前夜のミサに、広と在昌は赴いた。

「—— Veni, Veni, Emmanuel —— 来ませや来ませ、エマヌエルよ」

救世主の降誕を待望する聖歌が歌われる中、ミサに先立つ前晩禱と洗礼式が厳かに行われた。

陰陽師の嗣子であるから……という後ろ髪も、在昌はもはや断ち切っていた。

「この者の名は何と云うか」

ヴィレラ司祭の間に対して、在昌の「代父」を務める了齋は力強く答えた。

「マノエル・アキマサ」

「マノエル・アキマサよ。父と、子と、聖霊の御名によりて……」

マノエル、すなわち Emmanuel のポルトガル語、「主我らと共に坐す」。

こうして在昌は洗礼を受け、晴れて夫婦共々キリシタンとなった。

「—— Gaude, gaude, Emmanuel nascetur pro te, Israël —— 歡べや歡べ、エマヌエル汝が為に生まれ給う」

・了齋、ヴィレラの京滞在中に、在昌が京で最初のキリシタンとして洗礼を受けたというルイス・フロイスの記録あり。

・「我よりも父または母を…」——マタイによる福音書 10 章 37。

四 京都出奔

妻・広との仲は至って睦まじく、永禄元年（一五五八）二十歳の時に長女すえ（陶子）、永禄四年（一五六一）二十三歳の時には次女かな（可奈子）が生まれ、永禄七年（一五六四）二十六歳の時に、広は第四子を身籠もった。

在昌も広も、当然ながらキリシタンであることを隠していた。「異宗門」に対する風当たりは強く、都の南蛮寺はわずかふた月あまりで撤収となってしまった。が、堺に常設の南蛮寺が建てられたとあっては、毎年復活祭や降誕祭などの折にはミサに通うようになり、実はキリシタンであるという噂が次第に広まってしまった。

これを最も面白く思わなかったのは、在富の妻・木根子である。儒学家・神道家の家柄に生まれた保守的な気質は、いかんともしがたい。その苦言毒舌の矛先は、しばしば在昌へと向けられた。

父・在富は板挟みになり苦悶しつつも、在昌の才知を買って陰陽師としての指南を付けた。しかし学べば学ぶほど、家伝に頼った陰陽道の先行きへの不安と、西洋天文学への憧れが深まるばかりであった。

永禄七年（一五六四）在昌二十六歳の年の冬。ロレンソ了齋一行が堺を離れ、豊後に向け出発するという知らせが入った。伴天連に付いて本格的に西洋天文学を学ぶならば、この機を逃したらまたとない、千載一遇の好機である。

在昌は意を決した。

「在昌殿、名残惜しゅうござりますが……必ずや布教の勅許を得るべく、了齋は戻ってまいりますぞ」

別れを告げる了齋に対して、

「お別れには及びませぬ、了齋殿。私も共にまいりましょう」

「なんと……！？」

「——我よりも父または母を愛する者は、我に相応ふさわしからず。我よりも息子または娘を愛する者は、我に相応しからず——ですよ、了齋殿」

堅い決意を告げる在昌。

「但し、此度は広も一緒です」

「ええ。間の悪いことにちょうど身重の時ゆえ、ご迷惑をおかけするやも知れませぬが、どうか何卒ご一緒させてくださりまし」

広も堅い決心を告げた。子を孕んだ身ながら豊後への長旅、並々ならぬ決意ではない。当時としては、命を賭した旅と云っても過言ではない。

トレス司祭との再会も、何としてでも果たしたかった。

「……承知いたしました。この了齋、身を賭してでもお二人のお供をつかまつの次第にござりますぞ！」

二人の熱意に動かされて、了齋も力強く同行を承諾した。

冬至の近づく、底冷えする夜更けのことであった。

「可奈、良い子にするのだぞ」

まだ数え四歳の長女かな（可奈子）は、五十八歳になる山科言継やましなときつぐ邸に預けることとした。

「お任せなされよ！ 在昌殿のお子とあらば、我が孫も同然。しかとお守り進ぜようぞ」

勿論、父・在富には無断であった。親の死に目に会えぬであろうことも覚悟の上である。

「在富殿には折を見て、わしから良いように申し伝えておくで、在昌殿は己の信ずるところにのみ忠実にあれば良いのじゃぞ」

「山科殿……度々、本当に有難く存じまする」

「在昌殿、おぬしは本朝の陰陽道の未来を背負っておられる方じゃ。しかと良きものを学びて、立派に華を咲かせるのじゃぞ」

「はい。不肖在昌、しかと心得まして候！」

こうして在昌と広は、数え十歳の長男宇佐丸と七歳の長女すえすえこ（陶子）を連れ、了齋に付いて夜密かに都を発ち、堺から船で豊後目指して旅立った。

「殿、大変ですぞ！ 在昌殿が、在昌殿が……！」

明るく朝、在昌夫婦の出奔が知れるや、在富の家人は血相を変えて駆け込んできた。

それに対して、在富は意外にも冷静な様子であった。

「うむ、そうか。いずれこの如き日が来ようとは思っておったわ。あれは籠の中に甘んじる鶯ではない。隼の如き小僧じゃ」

そして、もはや今生の別れとなることを察してか、遠い目を庭の外へ遣った。

「在昌よ……どうか達者で、そして立派な陰陽師になりて戻るのじゃぞ」

- ・すえ（陶子）、かな（可奈子）という人物は架空。名の由来は生まれ年の干支の陰陽五行から。戊つちのえうま 午は陽の土と陽の火→土と火から生まれる陶器→すえ（陶子）。辛かのとり 酉はどちらも陰の金→「かな」。
- ・かなを山科言継に預けたという点も、当然架空。

五 道中出産

堺の港を船出してしばらく、一行が伊予堀江（現・愛媛県松山市北部）に立ち寄ったとき、第四子を身籠もっていた広はにわかに産気づいた。伊予堀江にはクリシタンの群があり、かの有名なルイス・フロイス（一五三二～一五九七）も滞在していた。

永禄七年十二月一日・西暦一五六五年一月三日、広は次男となる男児を出産した。

ところが広は、長旅の疲れもあって産後の容態が悪くなり、床に伏せてしまった。次男出産の喜びも東の間、在昌は狼狽に明け暮れた。

「了齋殿、どうか広を……」

「大丈夫ですぞ、イルマン・アルメイダ様に薬の手配をお頼み申しましたで」

まもなく、松山におり伊予を取り仕切る修道士ルイス・デ・アルメイダ（一五二五～一五八三）の元から、日本人修道士の漢方医が駆けつけてきた。

「パウロ教善と申します。奥方に薬をお持ち仕りました」

「おお、ありがたき御慈悲……すぐに診てやっただされ」

パウロ教善の看病の甲斐あって、広は一命を取り留め、ほどなくして快復した。

在昌は教善の見送りがてら、長男宇佐丸を連れて、アルメイダのもとへ礼を伝えに馳せ参じた。

「アルメイダ様、此度はまことにありがたき次第にござります……！」

深々と礼をする在昌を起こして、アルメイダは慈しみ深い眼差しで告げた。

「いいえ、在昌殿。それがしは何もしておりませぬ。教善の尽力と——貴方々の信仰が貴方々を救ったのでござります」

『汝の信仰が汝を救いたり』——なるほど、左様にござりますな。デオ・グラチヤス、主に感謝し奉る！」

アルメイダは元貿易商人の出身とあって、航海のための天文学に通じていた。在昌はアルメイダとすっかり意気投合し、天文学談義に花を咲かせた。

生まれた男児は、西の異国人の助けで生まれたことと、伊予堀江の鎮守・夷子三柱社えびすに因み、和名「戎丸」、洗礼名「フィデル」（「信仰深き者」の意）と名付けられた。のちの嗣子しし・在信あきのぶである。

そして年が明けた永禄八年（一五六五）正月、長男宇佐丸は数え十一歳にして修道誓願を果たし、メルシヨルと名付けられた。イエス・キリスト降誕の折に、東方より宝物を携えて祝福に訪れた占星術の三博士の一人・メルキオルに因んだ名だ。

妻の命を救われたことの感謝として、自らの初子を神の奉仕に献げたのである。

「宇佐丸、今後は耶蘇様に倣い、天主様を父と心得、身を尽くして仕え奉るのだぞ」

「はい。この身の尽きるまで、しかと仕え奉ります」

こうして一行は、無事豊後府内の港へ着いた。豊後府内は当時日本におけるキリスト教の中心地であり、大きな南蛮船が来航し、天主堂の他、イエズス会の運営する病院、コレジオ（神学校）、書庫など様々な施設が建ち並ぶキリシタンの都であった。

国際都市としてすっかり発展した府内の街を見渡して、一行は目を輝かせた。

「父上。日本にありながらまるで異国のような街でござりますね！」

「私も久方ぶりに訪れたが、これほど榮えておるとはたまげたことだ」

メルシヨル宇佐丸も興味津々である。

府内の天主堂で、在昌と広は念願のトーレス司祭との再会を果たした。

「お久しゅうござります、トーレス伴天連様！」

「おお、宇治丸殿に広殿。すっかり立派になられて……！」

久方ぶりの再会を心から喜ぶトーレスと、二人は熱く抱擁を交わした。

「ヴィレラ伴天連様が京におわしました折に、私めもついに洗礼を受け、名はマノエル・アキマサとなり申してござります」

「マノエル……良き名にござりますな。Emmanuel——主、我らと共に坐す」

「また、汝の霊と共に坐す」

「此度こそ、存分にこの地で修学なさりませ。バルタザールという天文学者を講師に付けますゆえ」

在昌はこの府内の街で、天文学ほか西洋諸学の修学を着々と行い、知識と経験を豊かに蓄えていった。また、修道誓願を立てたメルショルは修道院に入り、その他の家族も毎週ミサに与り、充実したキリシタン生活を過ごしていった。

- ・在昌の妻が伊予で出産し、産後キリシタンの介抱を受けた、また長男メルショルを修道士として献げた、というリス・フロイスの記録あり。
- ・パウロ教善の和名は、キョウゼンという記録のみ残っており、漢字は架空。
- ・「汝の信仰が汝を救いたり」——福音書に頻出、イエスが癒しの奇跡を行った後に掛ける言葉。
- ・戎丸という名、またフィデルという洗礼名は架空。伊予堀江の夷子三柱社（現・三穂神社）と、在「信」の字からヒントを得て考案。また「戎」は西方の異民族の意。

六 父・在富の死と嗣子問題

在昌らが豊後府内に到着して半年ほどの後、父在富^{しゅほう}は腫瘍を患い、八月に入ると急激に悪化。永禄八年（一五六五）八月十日、七十六歳にて薨去（死亡）した。

在富の子・在昌は豊後において不在ということで、嗣子（跡取り息子）問題が生じた。山科言継^{ときつぐ みかど}は帝から直々に、勘解由小路家の跡継ぎを沙汰するように命ぜられ、奔走した。最悪、以前に在富妻木根子の時にもせがまれた、自分の三男で数え十九歳になる鶴松丸改め^{もちつぐ}以継（一五四七～一五八五）に勘解由小路を継がせるよう命ぜられていたのである。生母は在富の末娘・阿多子であり、在富にとって外孫に当たる。

結局、時の安倍氏土御門家当主・土御門有春（一五〇一～一五六九）の四男・福寿丸十三歳（一五五三～一五七五）が土御門家所領の若狭名田庄から帰洛^{あきたか}し、在高と改名して勘解由小路家を相続することとなった。生母は、一五四二年に十九歳にて有春の継室となった、勘解由小路在富の娘・日枝子（一五二四～）であり、こちらも在富にとって外孫に当たる。

かくして、賀茂勘解由小路家が暦道のみならず天文道をも兼ねざるを得なかった時代から、安倍土御門家が天文道のみならず暦道をも兼ねざるを得ない時代となった。在富が遺した家伝の蔵書はあれど、師子相伝なくしては秘伝の暦道極意を体得することはできない。

十三歳の在高には当然荷が重すぎるため、実際は父・有春と兄・有脩^{ありなが}が蔭に日向に面倒を見た。しかし、それでも状況ははかばかしくなかった。具体的には、在高の代になってほどなく、日蝕と月蝕の予測を外すという大失態を犯してしまった。

永禄十一年（一五六八）に日蝕を外した後、このままではお家の恥さらしと思い詰めた父・有春は、心労のあまりに翌年病を得て、永禄十二年（一五六九）六月に六十九歳にて没してしまった。かくて、在高の兄・土御門有脩（一五二七～一五七七）が土御門家を嗣いだが、状況は好転しなかった。

病みがちな土御門有脩に代わり、元龜四年（一五七三）、わずか十四歳である息子の久脩^{ひさなが}（一五六〇～一六二五）が従五位下陰陽頭に叙任された。「押しつけられた」と云ってもいい。

さらに、在高が勘解由小路家を嗣いで十年後の天正三年（一五七五）、在高は二十三歳にしてにわか病没してしまい、再び賀茂勘解由小路家は断絶の危機を迎えた。

ここに至ってはもはや、土御門家の嗣子であるはずの久脩が、賀茂勘解由小路家を相続するしかない——

のちには土御門家を嗣いでもらわなければならない独り子であるから、豊後の在昌が帰洛するまでの間の中継ぎといえども——という、土御門家としては苦渋極まりない決断を迫られた。

かくして天正三年（一五七五）、十六歳の土御門久脩は勘解由小路在綱^{あきつな}として賀茂勘解由小路家を嗣ぐこととなった。正室には、在昌が京を去るとき山科言継のもとへ託し、今や十五歳となった次女かな（可奈子・一五六一〜）が迎えられた。これで久脩改め在綱は、在昌の娘婿ということになり、賀茂勘解由小路家の婿養子としての正統性を確保した。

しかしそれも束の間、天正五年（一五七七）一月には、やはり心労が祟ったのか、土御門有脩が五十一歳の若さで病没してしまった。唯一の嗣子である久脩改め在綱は、土御門家を嗣がなければならない立場である。かくして十二年のうちに、みたび賀茂勘解由小路家は断絶の危機を迎えた。

残る切り札はただ一つ。キリシタンとなり、伴天連とともに京を出奔し、豊後府内にて西洋天文学を学んでいるというフーテン陰陽師・在昌を、背に腹は代えられずに連れ戻すしかない。

すぐに豊後の在昌のもとに、帰洛要請の手紙が送られた。

「ついにこの時が来たか……今こそ、父上と多くの恩師の御期待に添わねばなるまい」

在昌は手紙を握りしめて、意を堅くした。

「勘解由小路家相続の件承知候、残務が済み次第帰洛する」との返信を承け、十八歳となった勘解由小路在綱は三月、土御門久脩として復姓復名、安倍土御門家の跡を嗣いだ。

「メルシオル、陶^{すえ}、鞠^{まり}、達者でな。鞠^{まり}、兄上・姉上の云うことをよく聞くのだぞ」

修道士となった長男メルシオル^{すいせい}瑞星二十三歳と、現地の日本人キリシタン信徒と結婚した長女すえ（陶子）二十歳、豊後府内で生まれた三女まり（鞠子）十歳は残ることとなり、在昌と広は十三歳になった次男戎丸を連れて堺への船に乗り込んだ。

天正五年（一五七七）七月、三十八歳になった在昌はいよいよ十二年ぶりに京の都へ帰還し、賀茂勘解由小路家を相続、従五位下陰陽頭に叙任された。時あたかも織田信長が天下人の礎を着々と築きあげていった天正年間安土時代。西洋天文学と和暦学を熟知統合した、キリシタン陰陽師の誕生である。

- ・山科言継の子・以継の生母が在富の娘という点は架空。
- ・勘解由小路在高の生母が在富の娘という点も架空。
- ・土御門久脩改め勘解由小路在綱の妻が在昌の娘という点も架空。
- ・メルシオルの和名「瑞星」は架空。東方の三賢者（「メルシオル」の由来であるメルキオルはその一人）が、奇しくきたえなる星の導きによってイエスの降誕を知りベツレヘムを訪れたという伝説（マタイによる福音書 2 章 2 ～ 11）にあやかった名。
- ・陶（架空）が豊後のキリシタンと結婚したという点は当然架空。
- ・まり（鞠）は架空人物。聖母マリアに因んだ名。
- ・在昌の官職は架空。但し、天正八年（一五八〇）「おんようのかみあきまさ」という史書の記述あり。位階は史実。

七 信長との出会い

上洛からほどなく、次男戎丸は元服して、在信^{あきのぶ}と名乗った。

在昌は父・在富から伝授された家学の賀茂暦道と、豊後府内で身に付けた西洋天文学を活かして、その手腕を遺憾なく発揮し、一躍朝廷で名を轟かせた。

その噂はじきに、天下人・織田信長にも伝わった。在昌の手腕を聞き、その数奇な来歴を知って、信長は

大いに関心を覚えた。ちょうど在昌が京に戻った天正五年（一五七七）の十一月、信長は従二位右大臣に叙任され、最盛期を迎えたところであった。

在昌の上洛に先立つ天正四年（一五七六）に着工した信長の居城・安土城は、天正七年（一五七九）に竣工した。在昌は落慶式の祓役として安土城に召され、息子在信を連れて赴いた。

「わあ……見事でございますね、父上！」

「ああ。実に壯観だなあ」

琵琶湖を見渡す丘の上に築かれた安土城には、いわゆる天守閣の先駆けである「天主」と名付けられた摩天楼がそびえ立ち、天下人にふさわしい威容を誇っていた。三層の大屋根の上に、六角の仏堂風の櫓、そして最上階には金に輝く望楼。前代未聞の大高層建築であった。

落慶式ののち、在昌は信長に近しく謁見した。

「陰陽頭・勘解由小路在昌にござります」

「大儀じゃ。そちの噂はかねがね聞いておる」

「恐縮にござります」

信長の私室は豪華に彩られ、南蛮寺のように舶来の珍品が並んでいた。彼の異国趣味が伺われる。

「豊後でのキリシタン暮らしについて聞かせてくれ」

在昌の見聞録を、信長は実に興味深そうに聞き入った。

「なるほど。南蛮学を取り入れつつも明国とは異なる、本朝ならではの^{やまごよみ}大和暦に改暦がそちの^{もくろみ}目論見か。実に愉快じゃ」

在昌の宿願である新たな暦法の構想にも、信長は賛意を示した。

「地も日も月・星も、みな虚空に浮かぶ^{たま}球である、とフロイスも申しておったのう」

舶来の地球儀を回し、天体望遠鏡を覗きつつ、信長は呟いた。

「これはそちが持ち帰った方が役に立つであろう」

「はっ。まことにありがたき所存にござります」

「また上洛の折には、ゆるりと話を聞かせてくれ。改暦の試みも楽しみにしておるぞ」

それらと、時計や方位磁針などまたいくつかの舶来の品々をその場で包ませつつ、信長は満足げに笑って、在昌を見送った。

「家宝にござりますね、父上！」

「ああ、またとない家宝だ！」

在信も、興味津々で賜り物を手に取りつつ、京へと戻っていった。

・在信という名は史書に記録あり。元服の時期は不詳。

・在昌と在信が安土城に招かれたという点は架空。

八 本能寺の変と奈良下向

豪放磊落な天下人、織田信長。しかし、盛者必衰、その天下は唐突に終わりを迎えた。あえて多言は無用、世に名高き本能寺の変。安土城に招かれてからわずか三年後、天正十年（一五八二）六月のことである。京の街は、にわかに殺気立った空気に包まれた。

「なんということか……信長殿、かつての御恩は生涯忘れませぬ……」

知らせを聞いて、在昌は愕然としつつ、賜り物の地球儀をくゆらせた。

「広、在信、すぐに旅支度だ」

「殿、どちらへ参りますの？」

「南都だ。万一のことがあつてはならぬゆえ」

累るいが及ぶことを警戒した在昌は、大事を取って、賀茂氏の傍流にあたる奈良の幸徳井家のもとへ家族を連れて下向した。時の当主、幸徳井友忠（一五四一～一六〇一）五十二歳は、一行を手厚くもてなした。

折しもその時、十八歳になった在信と同年の乙女が、奈良町の幸徳井邸を訪れていた。奈良の東、柳生の里に住む劍豪・柳生石舟斎やぎゅうせきしゅうさいむねよし宗厳（一五二七～一六〇六）の娘、勝子である。その母は幸徳井家の先代当主・友栄ともなが（一四八七～一五五八）の娘であり、勝子は幸徳井友忠めいにとって妹姪に当たる。

劍豪の娘らしく、凛として芯の通った大和撫子であった。

奈良滞在の間に、在信はこの娘と秘めやかな恋仲になり、子を宿してしまった。

在信は勝子との結婚を切望したが、勝子は柳生の家臣・安井永順ながよしという者と婚約をしており、二人の仲は束の間の悲恋、若気の至りに終わってしまった。

「分かりませぬ。なぜに愛し合う者が別れなければならないのでござりましょうか、父上……！」

「お前の心持ちは分かる。罪を犯したことはお前自らが重々承知であろうから、あえてことさらに咎めはせぬ。しかし、分かっておろうな……致し方あるまい」

「くっ……面目のうござります……」

在信は、打ち震えて口を噛みしめつつ、涙を呑んだ。

崩れかけた築地塀に蝉時雨が響く、暑い夏の日のことであった。

在昌一家が京に戻ったのち、勝子は男児を産んだ。吉備丸きびまると名付けられたその子は、幸徳井友忠が引き取って育てられることとなった。この男児こそが、のちに勘解由小路家が絶家した跡を受けて陰陽頭となった、幸徳井友景（一五八三～一六四五）である。

- ・在昌一家が奈良へ逃れた点は架空。
- ・幸徳井友景が在信の子という点も架空。友景の生没年は、『幸徳井世系考訂本』に依った。
- ・勝子が幸徳井の血を汲むという点も架空。幸徳井友景の母が勝子という名は、『幸徳井世系考訂本』に依った。
- ・幸徳井友景が柳生の血を汲むという点は伝承にあり。
- ・吉備丸という名は架空。名の由来は生まれ年の干支から。癸未→吉備。

九 メルシオルの死

本能寺の変から少し遡る天正八年（一五八〇）。二十六歳になったメルシオル瑞星は、豊後府内でイルマン（修道助祭）に叙階された。ひたむきに勉学と修道に励み、南蛮人にも日本人にも聞こえがよい、立派な好青年に成長していた。

しかし、当時のキリシタン情勢は決して平穏ではなかった。

十年前の元龜元年（一五七〇）六月、コスメ・デ・トーレス司祭の後任の日本宣教長として、フランシスコ・カブラル司祭（一五二九～一六〇九）が天草へ到来した。入れ替わるようにその年の九月、トーレスは六十歳で帰天（逝去）した。

日本人に受け入れられやすいように最大限の現地適応主義を採ったトーレスとは打って変わって、カブラルは、日本文化に理解を示さず原理原則主義を貫き、また日本人を未開な野蛮人と見なして軽蔑した。宣教地では領主の一存による強制改宗が行われ、神社仏閣が破壊され、伝統的習俗は否定され、日本人が司祭になることも認められなくなった。

そんな中で若くしてイルマンに叙階されたメルシオル、その逆境を超える秀逸な実力が伺われる。

だからこそ、トーレスの薫陶を受けたメルシオルは、日に日に強まる新宣教長カブラルの施策には大いに疑問を持った。

「このままでは日本のキリシタンの先がない。いつか必ずや大いなる迫害を受けるであろう……たとえ今の施策で信徒が増えても、これでは果たして『主の御心』に適うだろうか……」

メルシオルは意を決して、ガブラルに直談判しようと天草志岐へと赴いた。

「メルシオル瑞星と申す者にござります。この度は御謁見の場を賜りありがたく存じます」

「日本人の若造がイルマンか……豊後府内の群は生ぬるいものだな」

ガブラルは退屈そうな表情をはばかりことなくあらわにして、メルシオルの陳情の数々を聞き流した。

「もうよい。そなた、何か勘違いしておるのではないかね？ とどのつまり、そなたは日本人なのだ」

こうぶっきらぼうに言い放つのが、ガブラルの口癖であった。

悔しさに唇を噛みつつ、メルシオルは豊後府内へ戻った。

メルシオルは陳情書をしたため、前年の天正七年（一五七九）に来日して全国を巡っていた巡察師アレックスandro・ヴァリニャーノ司祭（一五三九～一六〇六）に送った。ヴァリニャーノは先代宣教長トーレスの適応主義を高く評価しており、真逆を行くガブラルのやり方を徹底的に批判した。

メルシオルの陳情も一役甲斐があつてか、翌天正九年（一五八一）、ガブラルは日本宣教長を解任された。しかし、後任には日本人に人気のあつたニュッキ・ソルディ・オルガンティーノ司祭（一五三三～一六〇九）ではなく、ガブラルの忠実な部下であつたガスパール・コエリョ司祭（一五三〇～一五九〇）が就任した。

そして、やがてさらに大きな問題が浮上してきた。日本人を海外移住にかこつけて奴隷として拉致しているという疑惑である。

天正十三年（一五八五）、三十一歳になったメルシオルは、女子修道院の奉仕をしていた十七歳の妹・鞠を連れて、再び天草志岐へ赴いた。薩摩の島津勢によって豊後が攻められるのではという危惧が強まってきたためでもあつた。

「そのような噂はキリシタンに敵する者のさんげん讒言だ。相手にしてはなりません」

ガブラルが日本を去つてのちも、その教育を受けた修道士が天草には多く残っており、メルシオルの陳情は再び一蹴された。すでに危険分子と見なされていてか、今回はコエリョ宣教長に直接対面すら許されなかつた。ヴァリニャーノ巡察使が去つてのち、天草のキリシタン上層部は再び乱れつつあつた。

（奴隷貿易の真否だけは、しかと調べねば……真ならば、キリシタンのみならず日本国を揺るがす一大事だ……）

そう考えつつ夕暮れの港を歩いていた時——メルシオルは不意に肩を強く掴まれた。

「おっと、イルマン殿。この先はなりませんぞ」

柄の悪い男達がメルシオルの前に立ちはだかつた。

「何者だ！ 何かやましいことがあるのか！」

「イルマン殿こそ。こんな港の隅で何をしておいでで？」

「いよいよ疑わしい。通したまえ！」

「お引き取りくださらねば……分かりますな？」

男は不敵な笑みを浮かべて、拳を握った。

「兄上！ どうなされたの！？」

「ああ、遅くなってすまぬな鞠」

「それよりも、お怪我……！」

晩に教会の宿坊へ帰ってきたメルシオルは、顔や腕に傷を負って、ひどく疲弊した表情をしていた。

「教会は腐り始めている。コエリョ様は宛にならぬ。なんとかせねば……」

傷を手当てされながら、メルシオルは呟いた。

その数日後。港での乱闘沙汰の際に、メルシオルが修道士でありながら人を殴ったことについての咎めがなされた。懺悔せねばイルマンの地位を剥奪するとの厳しいものであった。

「くそっ、私は被害者だ！ 百歩譲っても喧嘩両成敗ではないのか……」

メルシオルは憤りに震えた。

結局、期日までに懺悔も返答もしなかったメルシオルは、イルマンを剥奪された。立つ瀬のなくなったメルシオルは、イエズス会士自体を自ら退会した。

(噂の真なるは間違いない。あとは動かぬ証拠と告発の手段だが……)

ある日、木刀を携えて深夜の港を探索していたその時。

不意に闇から刃が閃き、血しぶきが舞った。

「ふっ、ここまでか……主よ、御国に来給う時には、我を思い出し給え……」

天正十三年（一五八五）。メルシオル瑞星、三十一歳・修道二十年の生涯は、かくして人知れず幕を下ろされた。

- ・メルシオルがイルマンに叙階されたこと、そしてイエズス会を退会してのち、天草で夜陰悲惨にも殺されたという記録がキリシタン文献にあり。それ以外は架空。
- ・「主よ、御国に来給う時……」——ルカによる福音書 23 章 42。

十 新たな天下人

天正十三年（一五八五）といえば、日本史上銘記すべき年である。この年、織田信長に代わって天下人となった羽柴秀吉（翌年九月、豊臣姓を賜る）が、武家では前代未聞の関白に任ぜられたのだ。

翌天正十四年（一五八六）七月より、秀吉は九州大遠征を開始。メルシオルの先見の明どおり、秀吉に対抗して挙兵した薩摩島津勢により、十二月には豊後大友勢が攻め落とされ、一大キリシタン都市として栄えた府内の街は、激しい戦火のうちに灰塵と帰した。

天正十五年（一五八七）四月、秀吉は九ヵ月におよぶ九州遠征を終え、筑前箱崎（現・福岡市）に入った。

九州でキリシタンの実態を目にした秀吉は、その勢力が想像以上に大きいことに危機感を抱いた。スペイン・ポルトガル勢力が日本侵略を狙っており、キリシタン布教はその足掛かりなのではないか——という疑いである。また、奴隷貿易の噂も危機感をさらに強めた。

同年六月、初めての大規模なキリシタン迫害である伴天連追放令が発せられ、京都の南蛮寺や長崎の公館は打ち壊された。しかしこれはあくまで肥大化した勢力を抑制することが目的であり、外国人聖職者やキリシタン大名は制約を受けたものの、日本人平民の信徒を中心とする各々の信仰は容認された。

さて、そのような情勢のもと、京で細々とキリシタン信仰を続けていた在昌一家だが、この追放令で京南蛮寺がなくなって、また以前のように年に数回、復活祭や降誕祭などの折に、堺の南蛮寺に通うばかりとなった。個人の信仰は容認とはいえ、やはりキリシタンに対して国家的規制令が発せられたことは、世間的体面を悪くして、上・中流階級のキリシタンはいっそう肩身の狭い境遇となった。

この堺の街で、在昌一家と特に懇意になった人物がいた。因幡国八上郡（現・鳥取県東部）の出身で、在家修験行者のしゅげんぎょうじや小倉浄因おぐらじょういん季雅すえまさと、その姉・杉。秀吉の因幡征伐の戦火を逃れて堺へ上ってきた人物である。

天正十六年（一五八八）、二十四歳になった在信は、小倉杉の娘で、十八歳になるひの檜乃と結婚した。柳生勝子との悲恋ののち塞ぎ込んでいた在信だが、これでようやく元気を取り戻した。

天正十八年（一五九〇）四月、豊臣秀吉は京に奈良東大寺をも凌駕する大仏と大伽藍を建立する計画を立てた。「京大仏」方広寺である。

この大仏殿建立に先立つ地鎮祭に際して、在昌五十二歳と在信二十六歳の父子は陰陽師として祭礼出仕した。在昌父子の生涯にとって一世一代の晴舞台であった。これによって在昌父子は豊臣秀吉の知遇を獲得し、在昌は正四位下、在信は従五位下に叙された。

- ・堺の民の記述は架空。
- ・大仏殿の地鎮祭に在信も出仕したことは架空。父子の位階授与も架空。

十一 鞠と在信とゴメス伴天連

瀬戸内海をゆくガレオン船の甲板上で、リュート、リコーダー、ヴィオラ・ダ・ガンバ、タンバリンなど洋楽器の調べと、楽しげな歌声のハーモニーが鳴り響いた。

Tant que vivray en âge florissant,
Je serviray Amour le Dieu puissant,
En fait, et dictz, en chansons, et accords.
——花咲く日々に生きる限り
私は愛という神に仕える
行いで、言葉で、歌と和音で——

彼らこそ、かの天正遣欧使節団の青年達の一行。天正十年（一五八二）より八年間にわたって、はるばる欧州各国を巡る長旅の末、方広寺大仏殿の地鎮祭が行われたその年・天正十八年（一五九〇）の七月に長崎へ帰国し、その秋、京へ上るべく堺へ向かう航路のことであった。

そしてその中に、美しいソプラノで加わる娘がいた。二十三歳になった在昌の三女・鞠。その年に日本宣教師となったペドロ・ゴメス司祭（一五三五～一六〇〇）の計らいによって、使節団の船に便乗して、父・在昌のいる京へと向かっていた。

年頃も近い使節団の青年達と、鞠はすぐに打ち解け、しばしの愉快的な船旅を満喫した。

宣教師にして優れた天文学者でもあるゴメス司祭は、天正十一年（一五八三）に来日し、豊後府内のコレジオにて講義を始めた。メルシオル二十九歳と鞠十五歳も師事して、大いに世話になった。そして例の島津軍による府内陥落のため、天正十五年（一五八七）には豊後より天草に逃れ、十九歳になった鞠と再会することとなった。またこれに伴って、豊後のキリシタンと結婚していた在昌の長女・陶すえも天草に逃れてきた。

兄メルシオルを亡くして、その魂を弔うべく修道女となり、失意と悲しみに暮れていた鞠にとって、ゴメス司祭、また姉・陶すえとの再会は大きな救いであった。ひたすら神学と修道に打ち込んだ兄メルシオルと異なり、鞠は父・在昌譲りで天文学に興味を示し、みるみるうちに師ゴメスも驚くばかりの天文女子に育っていった。

「お父上、お母上、兄上！」

「おお、鞠よ！ すっかり大きくなって……よくぞ無事に戻ってきた！」

堺に出迎えに来た在昌親子と再会した鞠は、三人と熱く抱擁を交わした。

「メルシオルお兄様は……」

「聞いておる。さぞや辛かったな……」

鞠の目に、涸れていた涙がほとぼしった。

ゴメス司祭に天文学の教示を受けたことを話し、贈られた貴重な天文書の数々を渡すと、在昌は大いに喜んだ。そして、在信も強く憧れを抱いた。

「父上、私も天草に留学してみようござります。父上の分までしかと学んで来ようござります！」

「そうか、それも良かろう。若いうちにしかできぬことだ」

父・在昌の賛同もあって、在信は決心を堅くした。

翌年の天正十九年（一五九一）閏一月、天正遣欧使節団は、京の豊臣秀吉の居館・聚楽第^{じゅらくだい}にて秀吉に接見し、旅の報告と持ち帰った宝物の数々の献上を行った。学んできた西洋音楽の演奏も行われ、秀吉は満足げに聴き入った。

そしてその後、二十七歳になった在信は、フロイス、ヴァリニャーノ、伊東マンショらと共に天草への船旅に就いた。妻・檜乃は第一子を身籠もっていたため、泣く泣く京へ残して単身で旅立った。

妻・檜乃は、翌天正二十年（一五九二）、のちに嗣子となる男児・貴船丸を無事出産した。

在信はゴメス司祭に師事し、着々と学識を身に付けていった。文禄二年（一五九三）、ゴメスは西洋天文学の書である『天球論』を著した。

文禄四年（一五九五）三十一歳になった在信は、多くの学識と貴重な書籍を得て京へ戻ってきた。この功績が認められ、正五位下の位階と、大蔵大輔^{おおくらたゆう}および暦博士^{こよみはかせ}の官職を授けられた。

- ・「Tant que vivray」——クローダン・ド・セルミジ（一四九〇頃～一五六二）作曲。
- ・鞠の言行は架空。
- ・天正遣欧使節団が秀吉の前で西洋音楽を演奏したことは記録にあり。
- ・在信の天草留学は架空。
- ・在信の妻・檜乃と子・貴船丸は架空。貴船丸の名は、生まれ年の干支から。壬^{みずのえたつ}辰、壬は陰陽五行では水の陽、辰は龍。水龍の神である貴船神社に因んだ考案。
- ・在信の官位授与は架空だが、文禄五年（一五九六）、「正五位下行大蔵大輔博士賀茂朝臣在昌」という署名による文書が残る。本作においては、在昌ではなく実際は在信が書いたものと設定した。世間に名が通っていない嗣子が、「某の息子」というニュアンスで父の名を借りて名乗ることは、この時代よくあった。

十二 常に共に在り

こうして豊臣秀吉の知遇を得、京の公家界でも重用されて幸福を楽しんだ勘解由小路家であったが、その日々は長く続かなかった。晩年の秀吉は独裁体制を強め、老害を振りまいていった。

文禄四年（一五九五）七月、秀吉の養子であり関白の地位を嗣いだ豊臣秀次は、突如嫌疑を掛けられて廃嫡された上、切腹を強いられた。それに連座して、武家・公家共に多くの者が肅正あるいは流罪となった。さらに秀吉は、秀次の痕跡までことごとく消し去ろうとするかのように、聚楽第を跡形残らず破壊し尽くした。なんとも狂気じみた沙汰である。

この時、実際には何も関係なかった天文博士土御門久脩^{つちみかどひさなが}までもがとぼちりを受け、秀吉の詰問を受けた。在昌は、娘婿である久脩の弁護に意を尽くし、助命はされたが、結局無罪放免とはならず、京を追放され代々の所領である若狭名田庄^{わつさきよ}に蟄居させられてしまった。

慶長二年（一五九七）二月、秀吉の命によって最初の国家的なキリシタン虐殺が起こった。フランシスコ会士とその指導下の信徒を中心とした、京のキリシタン二十六名が、耳たぶを削がれて京中引き回しの上、長崎で見せしめのように処刑された。助命された京のキリシタンは、ユスト高山^{うこん}右近と在昌一家くらいであった。以来在昌一家は、表向きには信仰を捨てたふりを通すことを強いられた。

翌慶長三年（一五九八）九月、秀吉は伏見城で没した。しかし、キリシタン迫害は時代の趨勢となっており、在昌一家の肩身狭い境遇は変わらなかった。

慶長四年（一五九九）八月、在昌は病を患って危篤に陥った。幼き日より折々世話になったひょうきん公家・山科言継ときつぐの跡を嗣いだ山科言経ときつねの上奏により、病床の在昌は最後の名誉として従三位に叙せられた。

「いよよ時が満ちた……主よ、汝今こそ、このしもべを安けく去らせ給う」

「祖父上おじょうえさま、どこへ行ってしまわれるの……？」

心配そうに付き添う八歳の孫・貴船丸に、在昌は静かに答えた。

「よい子だ、心騒がすでないぞ。天主様は常に我らと共に在り、天主様の御許みもとへ赴く私も、大いなる一つの命の内に抱かれて、今も何時も世々に、常に共に在るのだ」

かくして在昌は、六十一歳の波乱に満ちた生涯に、静かに幕を下ろした。

在昌の遺骸は、京都東山の真言宗六波羅蜜寺にて茶毘おおてらに付され、堺の同門・大寺こと念仏寺に葬られた。自ら希望して付けられた戒名は、常在院萬円天昌居士。「主は常に共に在り」と、「マノエル→萬円」という密かな含意を込めた名である。

妻・広は、在昌の墓前に付き添い弔いに勤めるべく、堺へ移住した。一時期ほどの勢力は削がれたものの、堺はいまだ自治都市をなしており、ここにおいては細々ながらキリシタン信仰に戻ることができた。

- ・土御門久脩が蟄居させられたことは史実。それに際して在昌が弁護を尽くしたという点は架空。
- ・在昌一家が慶長二年のキリシタン迫害の際にどうしていたのかは記録なし。
- ・在昌が従三位に叙されたという点は架空。
- ・「主よ、汝今こそ、このしもべを…」——ルカによる福音書2章29。
- ・在昌の茶毘、墓所、戒名なども架空。
- ・大寺念仏寺は、堺市堺区開口神社あくちの別当寺（現存せず）。

十三 とこしえに主の家に

翌慶長五年（一六〇〇）九月、天下分け目の関ヶ原の合戦が起き、徳川家康率いる東軍が勝利した。天下は豊臣家から徳川家に移ろいでいった。

それとともに、同年十一月には土御門久脩ひさながが蟄居を解かれて京に一時呼び戻され、翌年には若狭名田庄を引き揚げて京へ帰還した。土御門家の名誉回復とは裏腹に、豊臣寄りと見なされていた勘解由小路家は徳川家康の覚えが悪く、朝廷での立場も失っていった。

慶長九年（一六〇四）、広は病を患い、六十六歳で堺にて没した。母の看病と看取りに堺へ下ったことを機に、四十歳になった在信は京を引き払って堺に移り住んだ。

慶長十五年（一六一〇）、失火で全焼した方広寺大仏殿の再建のため地鎮祭が行われた。これにあたり在信は、十九歳に成長した息子・貴船丸改めあきすえに季とともに、堺から一時上洛して齋行を務めた。これが歴史に残る最後の舞台となった。

しかし、此度の齋主は土御門久脩。在信と在季は、位階に見合わぬ末席に置かれた。

土御門の家臣達は在信達にあからさまな侮蔑の眼差しを向け、聞こえよがしに陰口を叩いた。

「見よ。我ら陰陽師の席に、何とまあ邪宗門の徒が混じっておるぞ」

「げに。穢らわしいことじゃ」

在季が睨み返すと、土御門の家臣達は糞虫を見たような悪態で目を逸らした。

「これ、雑言は慎みたまえ」

「はっ、失敬いたしました……」

久脩は小声で家臣を咎めると、面目なさそうな面持ちで一礼を投げた。

「ああ、畜生！ 父上。久脩様はともかく、土御門の郎党共は最近いささか増長しておるのでは……どうもいけ好きませぬ」

「まあそう憤るな、在季。久脩殿は義理の甥、我が勘解由小路家にとって姻戚にあたる。縁者の出世は慶び申し上げるべきであろう」

キリシタンに対する迫害はますます強くなり、在信一家は京の公家界から忘れ去られていった。朝廷の陰陽道の支配権は、久脩を当主とする土御門家に移っていった。

慶長十八年（一六一三）、英国商船クローブ号が平戸に来航し、ジョン・セーリス提督が八月に堺を訪れた。国際情勢は移ろい、すでにスペイン・ポルトガルはアジアの制海権を失って、英国とオランダが大海洋帝国を築き上げていた。

豊後府内と天草での勉学の賜物で、ラテン語・ポルトガル語のみならず若干の英語をも解する鞠。堺で在信一家と接見したセーリス提督は、彼女の博覧強記ぶりに驚嘆した。リュートを奏でつつ英語の歌も歌って聴かせ、絶賛された。

四十三歳になった鞠は、このクローブ号に同乗して英国へ旅立つこととなった。もちろん、帰らずの船出である。

在信は、手土産として東洋星座の絵図や渾天儀などを携えさせて鞠を送り出した。

「旅路に幸いあらんことを——命の限り、恵みと慈しみがいつも汝と共に在らんことを」

「はい、兄上。何卒ご達者で——兄上の分まで、私はとこしえに^{しゅ}主の家に仕えますゆえ」

鞠はロンドンを經由してアイルランドへ行き、その片田舎の修道院で静かに生涯を全うした。

- ・慶長九年に勘解由小路在信が堺に住んでいるという史書記録があり。
- ・方広寺大仏殿再建地鎮祭の斎行者としては、賀茂在昌という名で記録が残っている。
- ・在信の子在季は架空。母方の伯父にあたる小倉浄因季雅（架空）から一字を取った名。
- ・セーリス提督との接見、鞠のアイルランド移住も架空。
- ・「命の限り…／とこしえに主の家に…」——詩編 23 編 6。

十四 千々の星々

慶長十九年（一六一四）五十歳の時、徳川幕府勢の豊臣秀頼勢に対する一度目の遠征、いわゆる大坂冬の陣が起きた。また同年、ついに根絶やしのキリシタン禁止令が発せられた。

いよいよ差し迫る危機を覚えた在信は、妻・檜乃の伯父である小倉浄因五十九歳を頼って、妻子を引き連れて因幡八上郡の若桜宿^{わかさ}に落ちのびた。

在信の勘は当たって、翌慶長二十年（一六一五）の大坂夏の陣で豊臣家は滅ぼされ、かつては「東洋のヴェネツィア」と呼ばれて繁栄を極めた堺の街も、戦火で全焼した。

かくして、賀茂勘解由小路家は歴史の舞台から消えた。勘解由小路家は絶家したものと見なされ、賀茂氏傍流の幸徳井家が賀茂曆道を継承し、元和四年（一六一八）には幸徳井友景三十五歳が陰陽頭に任ぜられた。在信と柳生勝子の間に生まれた、かの悲恋の落とし子である。

因幡若桜宿は四方を霧の降り立つ山に囲まれた山深き街道筋の宿場町で、材木屋の杉皮の煙がたなびくば

かりの静かな里。周辺には平家の落人の伝承が残る集落もあり、また後醍醐天皇が隠岐から京へ戻る折に立ち寄ったという伝承も残る地。隠れ里としてはうってつけの場所である。

この隠れ里に身を潜めた在信は、「賀茂在信」の名をひねって和賀佐茂信わかさしげのぶと名乗り、町の鎮守社・松神大明神（現・若桜神社）の神主となった。そして人知れず山合の星を眺めつつ、西洋天文学を取り入れた新たな日本独自の暦法を研究執筆して、静かな余生を送った。

「在季、見てみよ。今宵の星は素晴らしいぞ」

「まことに、星の綺麗な夜にござりますね、父上」

「月も、千々の星々も、天主様が指の業で据え給うたもの——その主しゅが御心に留め給うとは、人の子とは何者なのであろう……主が顧み給うとは」

寛永十五年（一六三八）、島原の乱が終結した年。勘解由小路在信改め和賀佐茂信は、因幡若桜宿で人知れず、七十五歳の生涯を終えた。

いつの日か、誰かが、大和暦を完成させることを望んで——

そして、主の御国が再びこの日本の地に訪れることを待ち望んで。

結

- ・因幡に逃れ、改名し、暦法を執筆という点は架空。
- ・幸徳井友景→「八 本能寺の変と奈良下向」参照。
- ・「月も、千々の星々も…」——詩編 8 編 4～5。
- ・在信の没年は架空。

【第二部 解説コラム】

第二部前半は、ルイス・フロイスらキリシタン文献の記述によるところが大きい。何ともドラマチックな「史実」がふんだんなのである。

伴天連が初めて京を訪れ、仏僧に議論を挑まれていた時、颯爽と現れた在昌が論破するというくだり——身籠もった妻と豊後に渡航する道中、妻が出産して容態を悪くし、キリシタン医師の介抱によって快復した感謝として長男を修道誓願させるというくだり——その長男メルシオルが、若くしてイルマンとなり、しかしイエズス会を退会させられたのち、何者かによって殺害されたというくだり——まさに、真実は小説より奇なり、である。

さて。メルシオルは、何故イルマンの地位にありながらイエズス会を退会させられ、そののち殺害されたのだろう。作者は、辻褄が合い、かつ最もドラマティックな展開を求めて、推理と空想を馳せた結果、それは彼が信仰を捨ててしまったからではなく、ひたむきな信仰ゆえにこそ——と仮定した。キリシタンの「暗部」に触れてしまい、それでも信念を貫き通した結果、そのような結末になってしまったのだ、と。

そして、陰陽師ファンならご存知かも知れない、幸徳井友景。柳生の血を引く剣術陰陽師——という空想が働く。これでまた一本の小説になりそうだ。

友景は本能寺の変の翌年生まれであり、柳生の血筋でありながらなぜか賀茂氏幸徳井家を嗣いだ、というところから想像して、在昌の息子・在信の落とし子であるというシナリオを考えた。

また重要な一点。在昌が京へ戻って陰陽師を嗣いだのは、すなわちキリシタンの信仰を捨ててである、という見方が従来されてきた。しかし作者は、むしろ生涯にわたって、また家族共々にキリシタン信仰を持ち

続け、それがためにキリシタン弾圧とともに歴史から消えていったのではないか、と考えた。

キリシタンと陰陽師は両立しないという思い込みは、陰陽道が「宗教」であるという認識が前提にあるのであろう。また、キリスト教が「厳格で排他的な宗教」であるという思い込みもあるのであろう。

しかし、少なくともまだこの時代の朝廷陰陽道は、宗教ではなくあくまで朝廷の職務である。のちの江戸時代、土御門家が陰陽道と神道を融合させて「土御門神道」を興したのちも、土御門家はなお仏寺の檀家であり続けた。

よって作者は、祭礼宗教として深く俗世間生活に関わる仏教よりもむしろより内面的信仰であるキリシタンと、造暦を中心とした淡々たる朝廷の職務である陰陽道の両立は不可能ではないと考えた。在昌の師が現地適応主義を採ったトーレス司祭であったとすれば、なおのことである。

在昌は生涯にわたり、堂々とキリシタン信仰を続けた、まさに「キリシタン陰陽師」であった——本作は史学論文ではなくあくまで歴史創作小説ではあるが、そのように高らかに謳い上げたい。